

泥 部 遺 跡

—発掘調査報告書—

1983

山 形 県
山 形 県 教 育 委 員 会

泥部遺跡

—発掘調査報告書—

昭和58年3月

山形県
山形県教育委員会

序

本報告書は、昭和57年度に実施した、県営生居川ダム建設事業にかかる泥部遺跡緊急発掘調査の結果をまとめたものであります。

発掘調査では、今から約3000年前の繩文時代後期から晩期にかけての住居跡をはじめ、多くの土器や石器などが発掘され、とくに東北各地との文化交流の一端をしめす、貴重な資料を得ることができました。幾千年のかなたで、厳しい自然と融和一体となりながら、新しい文化を創造する先人の心豊かな、たくましい生活ぶりがしのばれるところであります。

近年、埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは、増加の傾向にあります。とくに本県の産業基盤である農林事業は、地域の生産基盤の整備や福祉の向上を目的とし、豊かな県土を目指して鋭意進められておるところであります。一方、同事業は、数千年もの間土中に埋もれ続けてきた埋蔵文化財と直接的なかかわりを持つこととなり、その間には数多くの困難な問題が生じております。

県教育委員会におきましては、生活や文化の向上、地域環境の整備など、同じ立場から、これらの間の調整をはかり、今後とも埋蔵文化財の保護行政のために努力を続けてまいる所存であります。

最後ではありますが、本発掘調査にご協力をいただいた上山市教育委員会並びに関係各位に感謝を申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対するおおかたの理解の一助となれば幸いと存じます。

昭和58年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹正治

例 言

- 1 本報告書は、山形県教育委員会が山形県農林水産部から委託を受け、また国庫補助を得て昭和57年に実施した、生居川ダム建設事業に伴う土砂採集工事に係る泥部遺跡の緊急発掘調査の結果をまとめたものである。調査の期間は、昭和57年6月14日から同年8月7日までの延べ38日間である。
- 2 調査にあたっては、上山市教育委員会・県農林水産部耕地一課・県生居川ダム建設事務所並びに上山市生居地区の方々などの関係機関の協力を得た。記して感謝申し上げる。
- 3 調査体制は下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治（山形県教育庁文化課埋蔵文化財係長）

現場主任 佐藤正俊（同 技師）

調査員 長橋至 阿部明彦（同 技師）

事務局 事務局長 浜田清明（山形県教育庁文化課長）

事務局長補佐 後藤文夫（同 課長補佐）

事務局員 田内糸子 梨本稔 中嶋寛 渡辺修

（山形県教育庁文化課主事）

- 4 挿図の縮尺はそれぞれにスケールを示した。図版内の遺物は、完形土器は1/4、土器片は1/2、打製石器は1/1、磨製石器、礫石器は1/3とした。土製品、石製品は縮尺不同である。
- 5 本文中および挿図中の記号は、S T—住居跡・E L—炉跡・E P—柱穴・S K—土壙 S X—不明遺構、またF—遺構覆土・Y—床面である。遺物ではR P—土器・土製品・R Q—石器・石製品を示す。住居跡・炉跡・土壙などは全体に一連番を付け、柱穴は各挿図毎の一連の数字を示した。
- 6 本報告書の作成は、佐藤正俊・長橋至が担当し、執筆した。編集は、渋谷孝雄・佐藤正俊があたり、佐々木洋治が総括した。挿図・図版の作成にあたっては、前田和子・吉野映子・鏡克子・遠藤淑子・清野匡子・浦山和子がこれを補助した。また、土器実測については、佐藤喜広・浅野目勇・石井浩・山口美保子・美和子（山形大学生）の協力を得た。

目 次

<p>I 調査の経緯</p> <p>1 調査に至る経過..... 1</p> <p>2 調査の経過..... 1</p>	<p>IV 遺構と遺物</p> <p>1 遺構..... 10</p> <p>a 住居跡..... 10</p> <p>b 土壙..... 22</p>
<p>II 遺跡の位置と環境</p> <p>1 立地と環境..... 3</p> <p>2 周辺の遺跡..... 4</p>	<p>2 遺物..... 27</p> <p>a 土器..... 27</p> <p>b 完形土器..... 40</p>
<p>III 遺跡の概観</p> <p>1 調査の方法 6</p> <p>2 遺跡の層序 6</p> <p>3 遺構と遺物..... 9</p>	<p>c 土製品・石製品 49</p> <p>d 石器 55</p>
	<p>V まとめ..... 65</p>

挿 図 目 次

<p>第1図 泥部遺跡と周辺の遺跡..... 3</p> <p>第2図 遺跡全体図..... 5</p> <p>第3図 遺構配置図・層序図..... 7</p> <p>第4図 1・2号住居跡..... 11</p> <p>第5図 3号住居跡..... 15</p> <p>第6図 4号住居跡..... 17</p> <p>第7図 35～38号住居跡..... 19</p> <p>第8図 17～28号土壙..... 24</p>	<p>第9図 39～54号土壙..... 25</p> <p>第10図 土器実測図（1）..... 42</p> <p>第11図 土器実測図（2）..... 43</p> <p>第12図 土器実測図（3）..... 44</p> <p>第13図 土器実測図（4）..... 45</p> <p>第14図 土製品（1）..... 51</p> <p>第15図 土製品（2）・石製品 52</p>
--	--

図 版 目 次

<p>図版1 第I群・第II群・第III群土器 コブ付土器口縁部..... 30</p> <p>図版2 第IV群1類土器 第IV群2類土器..... 31</p> <p>図版3 第IV群3類土器 第IV群4・5類土器..... 32</p> <p>図版4 第IV群6・7・8・10類土器 第IV群9類土器..... 33</p> <p>図版5 第V群土器 第VI群・第VII群土器..... 34</p> <p>図版6 第VIII群土器 第IX群土器 35</p> <p>図版7 第X群土器 S T 2・3・4出土土器..... 36</p> <p>図版8 S T 1出土土器..... 37</p> <p>図版9 土壙出土土器（1） 土壙出土土器（2） 38</p>
--

図版10	土壤出土土器（3）一括土器	39
図版11	完形土器（1）	46
図版12	完形土器（2）	47
図版13	完形土器（3）	48
図版14	土製品（1）	53
図版15	土製品（2）	54
図版16	石 鎌	58
図版17	石錐・石匙（1）	59
図版18	石匙（2）	60
図版19	石匙（3）	61
図版20	搔器・削器	62
図版21	磨製石斧・打製石斧	63
図版22	有孔石製品・土錐・磨石・凹石・石棒	64
図版23	泥部遺跡遠景・近景 発掘調査風景（粗掘段階）	67
図版24	1～4号住居跡全景 1号住居跡全景 2号住居跡全景	68
図版25	3号住居跡全景 3号住居跡土層セクション 3号住居跡炉跡近接	69
図版26	4号住居跡全景 4号住居跡土層セクション 4号住居跡炉跡近接	70
図版27	13～19号土壤全景 11～19号土壤全景 19号土壤土層セクション	71
図版28	18～23号土壤全景 18～23号土壤土層セクション 23号土壤土層断面	72
図版29	36～38号住居跡・39～55号土壤全景 35・36a・b・c号住居跡全景	73
図版30	36a・37・38号住居跡全景 37・38号住居跡全景 36b・c号住居跡	74
図版31	38号住居跡全景 39～47・50～53号土壤全景 44～46・49号土壤他全景	75
図版32	36a号住居跡出土土器 37号住居跡出土土器（R P 346～348）	76

付 表 目 次

表-1	泥部遺跡発掘調査行程一覧	2
表-2	土器片出土地点一覧	29
表-3	完形土器・復元実測土器観察表	40
表-4	土製品・石製品実測図掲載資料一覧	50
表-5	石器出土地一覧	57

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

上山市には、数多くの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）があり、とくに須川と本流とする支流の前川や蔵王川流域の河岸段丘土の水田や畑地には、縄文時代から歴史時代にかけての遺跡が点在している。泥部遺跡もその中のひとつで、昭和56年に新しく発見された。

上山市の東部地区は、米作や果樹を中心とする農業が盛んな所で、とくに桜桃や葡萄などの果樹作物の栽培面積も多い地帯もあり、これら東部地区のかんがい用水は、蔵王川の流水をとくに水田の耕作に利用している。この農業用水には、蔵王火山帯の熊野岳爆発のため硫黄成分が混り、酸性の強い鉛毒水となっている。これを用水としている上山市東部一帯は年々大きな被害を受けており、用水の完全な真水化を図り、農業の発展を目的とする、県営事業による生居川ダムの建設が昭和63年の完成をめざして、着工することになったものである。

生居川ダム建設事業が昭和57年度より計画されたため、山形県教育委員会では、山形県生居川ダム建設事務所の依頼を受けて、昭和56年6月に遺跡詳細分布調査による現地確認調査を実施したところ、泥部遺跡を新規に発見し、ダム建設の関連事業として土砂採取が遺跡を含む一帯に計画された。さらに遺跡の時代・範囲・性格などを明らかにし、事業との調整を図る必要から、昭和56年10月15日に事業区域内について試掘調査を実施し、付近一帯に縄文時代後期から晩期を主とする埋蔵文化財の包蔵地を確認した。

この分布調査の結果に基づき、県教育委員会・上山市教育委員会・県生居川ダム建設事務所の関係機関により協議を進めて、事業計画と遺跡保存との観点から調整を図ったものである。その結果、泥部遺跡の緊急発掘調査による記録保存を実施することになった。

2 調査の経過

今回の発掘調査は、昭和57年6月14日（月）から8月7日（土）まで延38日間に亘ってダム建設の関連事業としての土砂採集事業区域に限って実施した。調査経過の概要は、第一段階から第四段階に分けて順次調査を進め、第一段階では遺跡の概要を知るために粗掘作業を中心にして精査区域（遺構・遺物の密集地）の確認を行なう。第二段階は重機械を使用して精査区域を拡張し、面整理作業により遺構の平面形などを確認する。第三段階は実際に遺構などの精査・検出を行ない、遺構の状態や遺物の出土状況などを観察し個々の記録を作成する。第四段階は、各遺構が検出された状態を平面実測や写真で全体的な記録をするものである。作業経過の詳細については発掘調査工程表（表-1）を参照されたし。

表-1 泥部遺跡発掘調査工程一覧

調査内容	月・日		6月		21～25日		28～2日		5～9日		12～16日		7月		19～23日		26～30日		8月		
	準備	器材準備	単	備他			(グリッド設定)			(測量区域の確認)											
相振重機使用																					(機械搬入)
相振重機搬出																					
遺構調査・検出																					
堅穴住居跡 (戸 跡)																					
遺構精査																					
主要遺物取上																					
簡易遠方設定																					
平土層面測定																					
レベル測定																					
全體写真																					
整理																					
備考																					

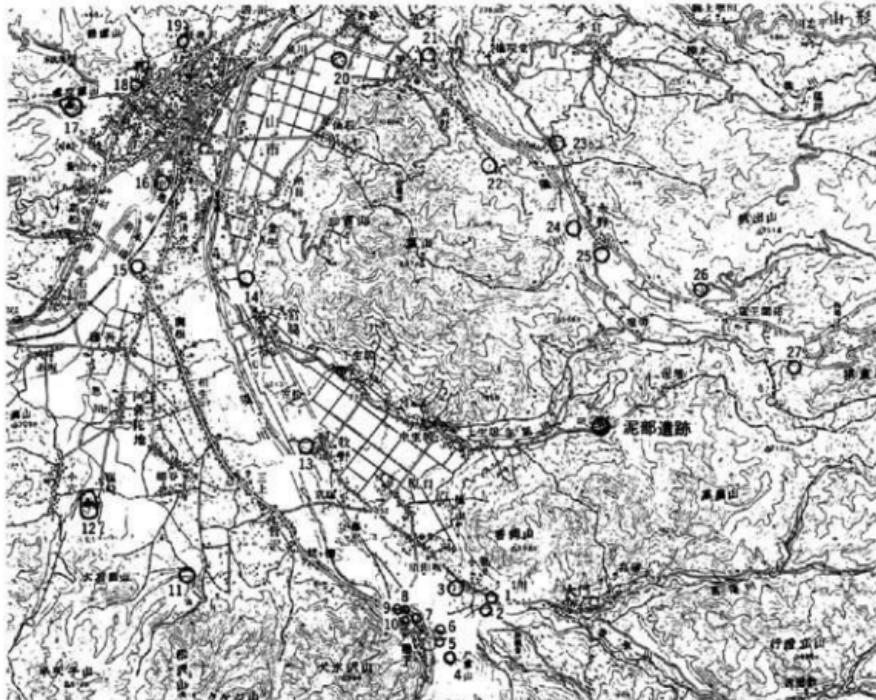
II 遺跡の位置と環境

1 立地と環境

泥部遺跡は、山形県のほぼ中央部の山形盆地最南端の小盆地、上山盆地の東端の山間にあり、さらに東側では宮城県と接している。上山盆地東部は、間近に藏王の山並が迫り、その火山の泥流により形成された緩傾面が盆地と丘陵を結んでいる。盆地南西部は緩やかな丘陵地帯で、北部では山形盆地の西部丘陵へと続いている。

この盆地は、南北に三日月形を示す小盆地で、最長径約12km・中央部最大幅約4kmを測る。中央部を曲流する須川は、盆地の東半分で河岸段丘を形成し、また同時に扇状地をも形成している。扇状地の扇端部は標高約180m、東へ向って高くなり、扇頂部では約300mとなっている。

本遺跡は、上山市上生居字包小屋1136他に所在し、藏王火山帯の泥流によって形成された丘上の山麓に在り、上山盆地を東から北へ流れる須川の支流、生居川上流の右岸段丘上



第1図 泥部遺跡と周辺の遺跡 (S = 1 : 75000)

に立地し、標高307～310mを測る。遺跡の南側には、県道宮脇・泥部線があり、遺跡との比高差は3～5m前後となる。遺跡は、全体に東側から西側にかけて傾斜しており、東側と西側ではかなりの比高差がある。地目は、水田・畑地・桑園・宅地となっている。また、東側と西側の背後地には2ヶ所の湧水地が認められる。

2 周辺の遺跡

上山市にある遺跡の数は、「山形県遺跡地図」（昭和53年山形県教育委員会編）によると41ヶ所の縄文時代から歴史時代にかけての遺跡が明記されている。なお旧石器時代の遺跡は現在まで発見されていない。上山盆地を形成する須川の流域の河岸段丘上には、縄文時代の遺跡が多く点在し、中でも盆地東部の牧野・須田坂・榎下地区にかけては牧野遺跡をはじめとして元屋敷・台の上・久保川・手塩原遺跡など縄文時代中期の遺跡が偏在している。また、盆地中央部の須川と前川が合流する付近では、あまり遺跡が確認されず思い川遺跡や高野遺跡などが発見されているのみである。蔵王川の流域においても7ヶ所ほどの遺跡が確認され、縄文時代中期・後期・晩期などの遺跡で、縄文時代でも比較的新しい時期である。

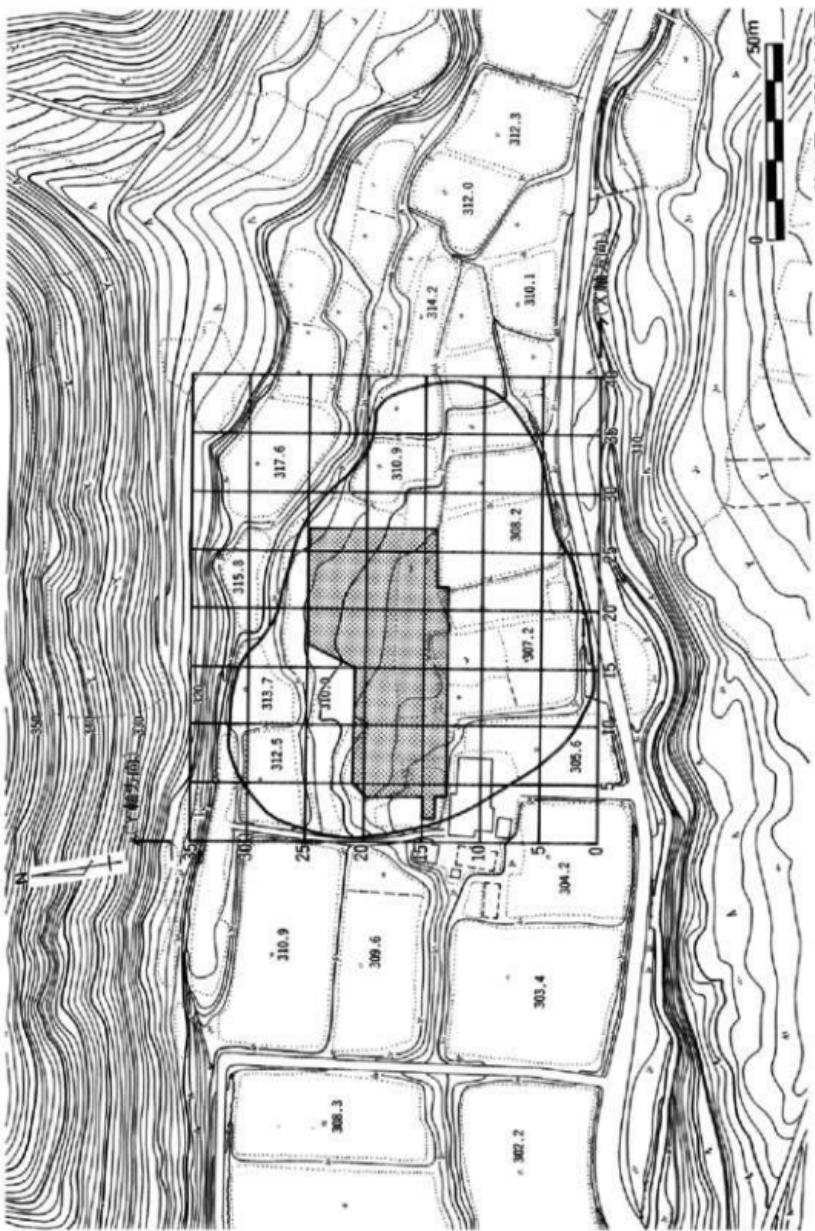
これら縄文時代の遺跡では牧野遺跡と思い川遺跡の発掘調査がなされ、牧野遺跡では昭和32年と昭和50年の2度にわたり上山市教育委員会が調査を実施した。縄文時代中期初頭大木7b式期の住居跡や土壙が検出され、とくに三脚土製品が多く出土し、県内を代表する遺跡である。思い川遺跡は、県営ほ場整備事業に伴って県・市教育委員会が主体となり発掘調査が実施され、縄文時代中期大木7b～8a式期の集落跡が明らかになった。

上山北部地区には、四ツ谷古墳群や土矢倉古墳、三千刈窯跡や葉山窯跡など、奈良時代から平安時代にかけての古墳や窯跡が点在しており、上山盆地をかこむ丘陵地帯には、鎌倉時代から室町時代にかけての、高橋城跡・榎下城跡・陣山館跡などの城館跡が確認されている。

〈周辺の主な遺跡〉 (第1図)

1 久保川遺跡(縄文時代)	10 手塩原遺跡(縄文時代)	19 荒町遺跡(平安時代)
2 丸山遺跡(〃)	11 松沢遺跡(〃)	20 土矢倉古墳群(古墳時代)
3 虚空藏平遺跡(〃)	12 墓山館跡(室町時代)	21 高野A遺跡(平安時代)
4 榎下城跡(室町時代)	13 枚野遺跡(縄文時代)	22 高野B遺跡(縄文時代)
5 台の上遺跡(縄文時代)	14 宮駒遺跡(〃)	23 薄沢遺跡(平安時代)
6 煙硝窯遺跡(弥生時代)	15 思い川遺跡(〃)	24 川原遺跡(縄文時代)
7 シャクレ西跡(縄文時代)	16 高野遺跡(〃)	25 前下遺跡(〃)
8 開渡戸遺跡(〃)	17 高橋城跡(〃)	26 上ノ原遺跡(〃)
9 元屋敷遺跡(〃)	18 松山遺跡(平安時代)	27 蔵王開拓遺跡(〃)

第2図 運防全体図



III 遺跡の概観

1 調査の方法

今回の発掘調査は、泥部遺跡のほぼ全域にあたる東西約120m・南北約80mの範囲である。発掘対象面積は約9,600m²について実施し、とくに遺構や遺物が密集する地区（精査地区）を重点に発掘調査を進め、遺跡の中央部から南側にかけて拡張をし、精査面積2000.5m²を調査したものである。

発掘調査は、事業区域内全体にグリッドを設定し、グリッドの基線を土取り事業実施杭に基点を設けて5—5グリッドとして、グリッド基線のY軸方向はN—10°—Wを計り、3×3mを1単位とするグリッドを設定する。遺跡の中央部から3×12mあるいは3×15mのトレンチを併用して、遺跡の東側・西側・北側に向けて粗掘作業を開始し、遺跡のほぼ中央部付近を大きく拡張し、順次調査を進めた。（第2図 図版2）

調査の進行状況（表-1）は、第一段階で井桁状にトレンチを入れ遺構・遺物の密集地区を確認する粗掘作業を実施し、第二段階は確認した密集地区を拡張し面整理作業による遺構の平面を確認し、第三段階では確認した遺構の精査・検出作業を、第四段階で遺構・遺物全体の記録を中心とする作業である。（図版1・2）

2 遺跡の層序

本遺跡は、生居川によって開析された沖積河川段丘上の微高地に立地し、全体として東側・北側が高く、西側・南側で低くなり傾斜している。遺跡の北側や南側の一帯では、水田の開田のため削平され、包含層は認められず攢乱されている。精査地区的地形は、北東が一段と高く急傾斜地となり、精査地区的中央部が傾斜変換線となり、南西側で緩傾斜地となっている。

遺跡の基本的な層序は、次の5層に大きく分けられる。（第3図）

- | | |
|-----------|---|
| I層 黒色土 | 水田・畑地による耕作土。精査地区の中央部でやや厚く堆積している。厚さは10~15cmである。 |
| II層 黒褐色土 | 風化礫粒や炭化粒子を含む微砂質土。厚さは25~40cmである。遺物包含層である。 |
| III層 暗褐色土 | 炭化粒子を含み堅くしまっている。厚さ15~30cmである。主に縄文時代後期の遺物が含まれる。 |
| IV層 褐色土 | 微砂質土で小礫粒などが含まれる。厚さ15~25cmである。漸位層で縄文時代後期の遺構が確認される面である。 |



第3図 遺構配置・層序図

V層 褐色土 磚が多量に混る。精査地区の南東側で認められる。

VI層 黄褐色土 ローム質で砂質に富む。(地山)

3 遺構と遺物

(1) 遺構について (第3図)

本遺跡で検出した遺構は、堅穴住居跡10・土壤44・不明遺構2である。遺構は大きく分けて縄文時代後期と晩期に分けられ、縄文時代晩期は調査区の北東側の地区に集中している。

縄文時代後期の遺構の分布は、調査区の中央部寄りから西側では1・2・3号住居跡がそれぞれ重複し、4号住居跡は1号住居跡の北側に隣接している。土壤はこれら住居跡群の周りに重複あるいは隣接して位置し、24・25・26・32号住居跡は住居跡と重複している。7・8・9・10号土壤は4号住居跡の西側に、5・6・33・34号土壤は3号住居跡の南側に、11~28号土壤は1・2号住居跡の南側に隣接あるいはそれぞれ重複して在る。調査区の中央から西側に位置する1号住居跡や土壤群などは、傾斜変換線の南側にあり緩傾斜地や平坦地に位置する。

調査区の北東側では、急傾斜地にあり縄文時代晩期住居跡の下層に認められそれぞれ重複している。土壤は住居跡の東側に位置してそれぞれが重複している。

縄文時代晩期の遺構は、調査区の北東側に35・36a号住居跡があり、13号土壤が離れて位置している。不明遺構58・59号土壤は、33・34号土壤の西側と南側に隣接してあり、土壤内にローム質の覆土がドーナツ状に堆積している土壤である。

(2) 遺物について (第3図)

今回の調査で出土した遺物は、整理箱に約135箱を数え土器・土製品が約130箱、石器・石製品が約5箱である。遺物のほとんどはII・III層の遺物包含層と住居跡や土壤覆土から出土している。

遺物の出土状況は、包含層より出土した遺物では調査区の中央部・中央の西側寄り・中央の北東寄りにかけて最も多く出土し、調査区の西端・南端および東端にかけては遺物の出土が希薄になり、遺物の分布状態と一致している。縄文時代前期や中期の土器は調査区の東端地区で出土している。

遺構内から出土した遺物は、住居跡では1・2・35・36a・37号住居跡内の覆土中から多量の土器片や礫石器が出土し、遺物の廃棄現象がみられる。その他の住居跡は全体に覆土上層から出土する程度で、床面からの出土も少なくなっている。土壤では13号土壤で埋設土器が一個体出土している他は、量的には少ない。

IV 遺構と遺物

1 遺構

a 住居跡

1・2号住居跡（第4図 図版24）

調査地区の中央部の緩傾斜地、12~14・17~20グリッド内に位置し、西側で3号住居跡と南東側で20~22・28号土壙とそれぞれ重複し、北西側で4号住居と隣接している。遺存状態は、1号住居跡の中央部・2号住居跡南側で桑木の根によって覆土上層が擾乱を受けている。他はほぼ良好である。確認面はIII層下部からIV層上面にかけて確認され、住居跡の構築はいずれも床面がVI層上部を若干掘り込んでいる。

(1号住居跡)

平面形は、北側と南東側でやや脹らむ不整の方形を呈している。大きさは長軸径9.00m・短軸径8.18mと計り、確認面から床面までの深さは14~42cmである。壁は西側から北側にかけて緩やかに、東側から南側にかけてはほぼ垂直に掘り込まれている。現存する壁の高さは10~36cmである。壁溝や周溝は認められない。床面の状態は、全体に軟弱であり起伏があり南側から北側にかけて緩やかに傾斜している。柱穴は56本で、E P 55~110であり、大きさは径15~32cm・深さ24~41cmである。柱穴は全体に壁寄りに位置して巡っているが、全体的な柱穴の構成は不明確である。おそらくその構成は、数期に亘って拡張ないし建替があったと考えられる。炉跡については検出されなかった。

覆土の状態は、北東側から南北側に流れ込むようにレンズ状に堆積し、北東側の覆土上層中に35~60cmの人頭台の疊が流れ込んでいる。覆土層は、15層黒褐色土（風化疊粒が含まれ堅い）・16層黒褐色土（16層に近似するが炭化粒子を含む）・17層暗褐色土（炭化風化疊粒を含み軟らかい）・18層褐色土（炭化粒子を多量に含む）で、全体として砂質土である。遺物の出土状況は、15~17層にかけて多く出土し、18層になると希薄になる。

本住居跡の時期は、縄文時代後期の新地式期に相当する。

(2号住居跡)

平面形は、東側と南側がやや脹らむ不整の長方形を呈している。大きさは長軸径7.28m・短軸径4.62mを計り、確認面から床面までの深さは15~32cmである。壁は南東側・南側・南西側で明確に確認され、緩やかに掘り込まれており、現存する壁の高さは10~12cmである。壁溝や周溝は認められない。床面は全体に軟弱で、おおむね平坦である。

柱穴は54本検出され、E P 1~54である。大きさは径29~47cm・深さ32~59cmである。柱穴の構成は、全体に住居跡の中央部南寄りから北側にかけて壁際に沿うように在り、ま



た南側に若干位置している。柱穴の構成から考えると本住居跡は、E P 2~10とE P 18~30とE P 43~50にかけて構成される柱穴群と、E P 1・5~10・13~17とE P 32~42になる柱穴群とあり、おそらく東側と南側に1~2回に亘って拡張したとみられる住居跡である。炉跡は検出されなかった。

覆土の状態は、1号住居跡と同様な堆積となっている。覆土層は、1層黒色土（炭化粒子や風礫粒を含む）・2層黒褐色土（炭化粒を多く含み軟らかい）・3層暗褐色土（炭化粒子を多量に含み軟らかい）・4~9層暗褐色土ないし黒褐色土（柱穴覆土で、炭化粒子を含み軟らかい）。7・8・9・13・14層は暗色土で黄褐色土ブロックが混る）である。遺物の出土状況は、南側の覆土1・3層で多量に出土し、床面からも多く出土している。

本住居跡の時期は、縄文時代後期後葉の新地式期に相当する。

1・2号住居跡および土壤群との重複関係は、2号住居跡は1号住居跡・20・28・29号土壤よりも新しく、また1・3号住居跡では3号住居跡が新しく、22・23号土壤と1号住居跡では、1号住居跡が新しい。

3号住居跡（第5図 図版25）

調査地区の中央部の西側寄りの緩傾斜地、9~12~17~19グリッド内に位置し、東側で1号住居跡と重複し、住居跡内で24・26・27号土壤で重複し、南東側で6号土壤と接している。遺存状態は、全体に桑木の根によって覆土上層が擾乱を受けており、下層では良好である。確認面は、III層の下部からIV層の上面にかけて確認される。住居跡の構築状態はVI層上部を若干掘り込んで造られている。

平面形は、北側の壁中央部がやや脹らむ不整の長方形を呈している。大きさは長軸径7.20m・短軸径5.40mを計り、確認面からの深さは24~28cmである。壁の状態は、全体的に緩やかに掘り込まれ軟弱であるが、東側24号土壤付近の壁体は堅くしまっている。壁溝や周溝は認められない。床面の状態は、住居跡の中央部から東側寄りおよび炉付近では起伏に富み堅く踏みしめられており、他はほぼ平坦で軟弱であり、とくに住居跡の西側から南側にかけては軟弱である。

柱穴は26本検出され、E P 1~26である。主柱穴はE P 1~7で住居跡の中央部東寄りから西側にかけて、炉跡（E L31）を中心にして巡って位置し、大きさは径28~39cm・深さ40cm前後と深さも一定している。支柱穴はE P 8~26で径25~32cm・深さ21~41cmを計り、北辺壁と南辺壁および東辺壁と西辺壁にある柱穴がそれぞれに対応しているのが特徴である。

炉跡（E L31）は、住居跡の中央部の西側寄りに位置する地床炉である。平面形が不整

の梢円形を呈し、大きさは長径80cm・短径53cm・床面からの深さは12cmを計る。全体的にはあまり焼成されておらず、焼土の堆積は1~2cmと薄い。東側の壁体が他から比べると若干焼けている。

覆土の状態は、北側から南側に流れ込むようにレンズ状に堆積している。覆土層は、大きく5層に分けられ、1層黒褐色土(色調は黒色に近似、風化礫粒や炭化粒子を含み堅い)・2層黒褐色土(1層に近似するが炭化粒子が多く軟らかい)・3層黒褐色土(炭化粒子を多量に含み2層より軟らかい)・4層暗褐色土(黄褐色の斑点が認められ軟らかく炭化粒子も若干混る)・5・6層暗褐色土(柱穴覆土で炭化粒子が混り軟らかい)であり、全体に微砂質土である。遺物の出土状況は、1~2層にかけて出土し、3層から床面にかけてはあまり出土していない。

本住居跡と1号住居跡・24・26・27号土壤とのそれぞれの先後関係は、1号住居跡や土壤よりも新しい。また本住居跡の時期は、出土した土器からみて縄文時代後期の新地式期に比定されるものである。

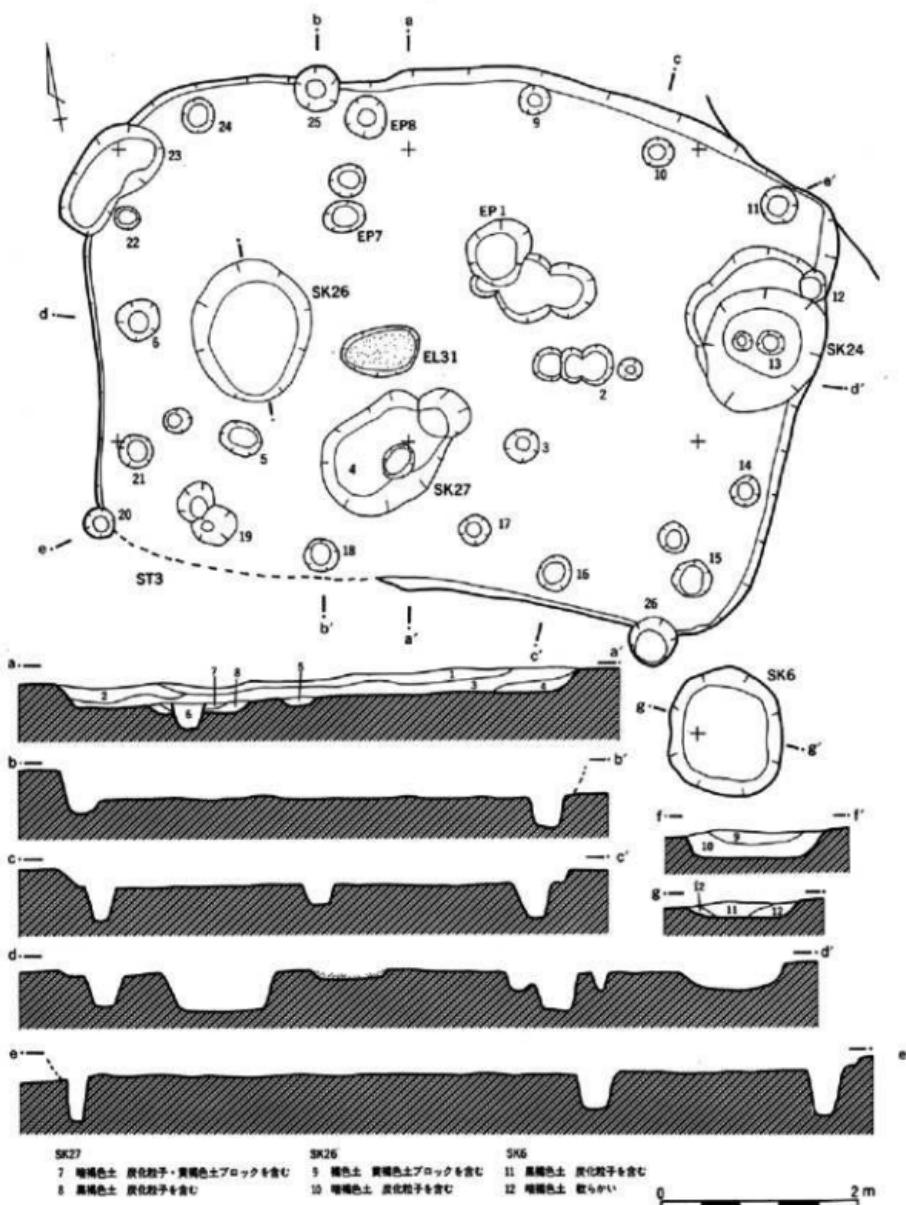
4号住居跡(第6図 図版26)

調査区の中央部の西側寄り緩傾斜地、10・11・19~21グリッドに位置している。南西側で25号土壤と重複し、東側で1号住居跡と西側で7~10号土壤とそれぞれ隣接して在る。遺存状態は、北側中央部の壁で桑木の根により一部攪乱を受けており、他はほぼ良好である。確認面はIII層中に確認され、住居跡床面の構築は、VI層下部まで掘り込んで造られている。一部南西側の25号土壤付近ではIV層面が認められる。

平面形は、北側の中央部東側寄りと南西側がやや脹らむ方形を呈している。大きさは長軸径6.10m・短軸径5.72mを計り、確認面からの深さは34~41cmである。壁の状態は北側の中央部から西側および南側の西寄りでほぼ垂直に掘り込まれ、東側と北側・南側の一部で緩やかに掘り込んでいる。壁体は全体に軟弱で凹凸がみられる。現存する壁の高さは、15~38cmである。壁溝や周溝は認められない。床面の状態は、北側壁付近と南側壁際でやや高く凹凸がみられ、中央部や炉跡付近ではほぼ平坦でやや堅く踏みしめられている。

柱穴は17本検出され、EP1~17である。大きさは径36~72cm・深さ24~36cmである。柱穴は、いずれも壁際に位置して巡っており、ほぼ垂直に掘り込まれている。とくに、EP1とEP12、EP3とEP9、EP5とEP15、EP6とEP16がそれぞれに対応している。中央部には認められない。他のビットは本住居跡よりも新しい時期のビットである。

炉跡(EL30)は、住居跡のほぼ中央部に位置する地床炉である。平面形は、ほぼ円形を呈し、大きさは長径80cm・短径76cm・床面からの深さは16~18cmである。底面のみ若干



第5図 3号住居跡

焼成を受けているが、他は余り認められない。焼土の堆積はみられない。

覆土の状態は、北東側から南西側にかけて流れ込むようにレンズ状に堆積している。覆土は大きく4層に分けられ、1層黒色土（炭化粒子・風化礫指頭台が多量に含まれ堅い）・2層黒褐色土（炭化粒子・風化礫粒が含まれやや軟らかい）・3層黒褐色土（炭化粒子が多量に含まれ軟らかい）・4層暗褐色土（褐色土・黄褐色土ブロックや炭化粒子が含まれる）・5・6層暗褐色土（柱穴覆土で炭化粒子や黄褐色土のブロックが若干含まれる）である。

遺物の出土状況は、1層から3層の上部まで多量に出土し、土層堆積状と同様な方向で流入している。RP150は、住居跡の中央部の東側寄りから床面に接するように、正位置の状態で出土し、投棄された状態よりも床面に放置された状態で出土している。

本住居跡と25号土壙の先後関係は、25号土壙は本住居跡の精査の際に確認され、また土層断面の観察により、本住居跡が新しい。本住居跡の時期は、出土した土器からみて縄文時代後期の新地式期に相当する。

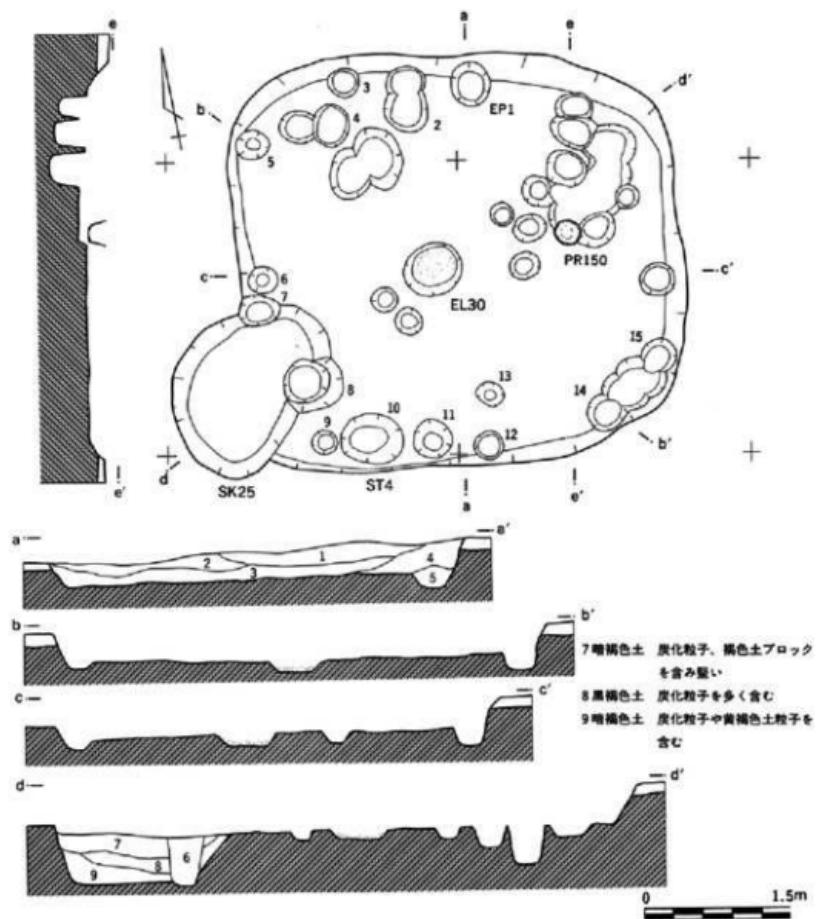
35~38号住居跡（第7図 図版29~32）

調査区の北東側の急傾斜地、15~18・21~24グリッド内に位置している。住居跡群はそれぞれ重複し、35・36b・36c号住居跡の東側では39・40・44・49・50号土壙などと重複あるいは隣接している。遺存状態は、住居跡の覆土上層が桑木の根によって部分的に攢乱されている他はほぼ良好である。確認面は35・36a号住居跡ではII層下部からIII層上面で、36b・c・37・38号住居跡はIII層下部からIV層中で確認される。住居跡床面の構築は、35・36a号住居跡ではIII層下部あるいは36b・37号住居跡の覆土中を掘り込んで床面としている。36b・c・37・38号住居はVI層中をわずかに掘り込んで床面としている。

〔35号住居跡〕

平面形は、北東側と北西側の隅がやや丸味を示す橜円形を呈する。大きさは長径5.90m・短径4.76mを計り、確認面からの深さは43~48cmである。壁の状態は、東側・北側・西側で確認され、ほぼ垂直に掘り込まれ、全体にやや堅くしまっており、北西側では凹凸がみられる。現存する壁の高さは38~44cmである。壁溝・周溝は認められない。床面の状態は住居跡の中央部と炉跡周辺部が堅く踏みしめられ、壁際では軟弱であり、全体的にほぼ平坦である。

柱穴はEP16~32で、17本検出されている。主柱穴は3本確認されEP16~18で、住居跡の中央部と北側寄りと南側寄りに位置している。大きさは径24~38cm・深さ35~42cmである。支柱穴はEP19~32で14本検出され、住居跡の壁付近あるいは壁に接して巡っている。大きさは32~64cm・深さ29~43cmでほぼ垂直に掘り込まれている。



第6図 4号住居跡

炉跡 (E L55) は、住居跡の中央部の南西寄りに位置する地床炉である。平面形は梢円形を呈し、大きさは長径44cm・短径32cm・床面からの深さは8cmである。底面が若干焼成を受けている程度である。

覆土は、北側から南側の方向に流れ込むようにレンズ状に堆積している。覆土層は大きく7層に分けられ、3層黒色土（炭化・風化粒を多量に含む）・4層黒褐色土（3層と近似）・5層暗褐色土（炭化粒子を含み軟らかい）・6層黒褐色土（炭化粒子を多量に含む）

7層暗褐色土（炭化粒子・褐色土ブロックを含む）である。遺物の出土状況は、3～4層にかけて多く出土し、床面から出土のものは少ない。

本住居跡の時期は、出土した土器からみて縄文時代晩期大洞BC式期に相当する。

〔36a号住居跡〕

柱穴の配列状態や遺物の出土状況および土層断面の観察から住居跡としたものである。平面形は、北側と南側がやや脹らむと考えられる梢円形を呈している。推定の大きさは長径4.90m・短径4.30mで確認した面からの深さは21～26cmである。壁の状態は不明である。床面は北側の一部で確認され、平坦で軟弱である。柱穴は、EP1～15で15本確認される。柱穴の配列は、主柱穴がEP1～5で中央部に長方形状に並び、EP6～15は壁に沿うようにあり支柱穴となっている。炉跡や周溝・壁溝は不明である。

覆土は、北東側から南西側にかけて流れ込むようにレンズ状に堆積し、大きく2層に分けられる。1層黒色土（炭化粒子・風化礫粒が多い量に混り軟らかい）・2層黒色土（1層に近似するが炭化粒子が多く含まれる）で、全体に微砂質である。

遺物の出土状況（図版32）は、RP121～123で覆土1・2層の上面で住居跡中央から南西にかけてあり（17～21グリット杭付近）、南西側へ投棄した状態で出土している。

本住居跡の時期は、出土した土器からみて縄文晩期大洞BC式期に相当する。

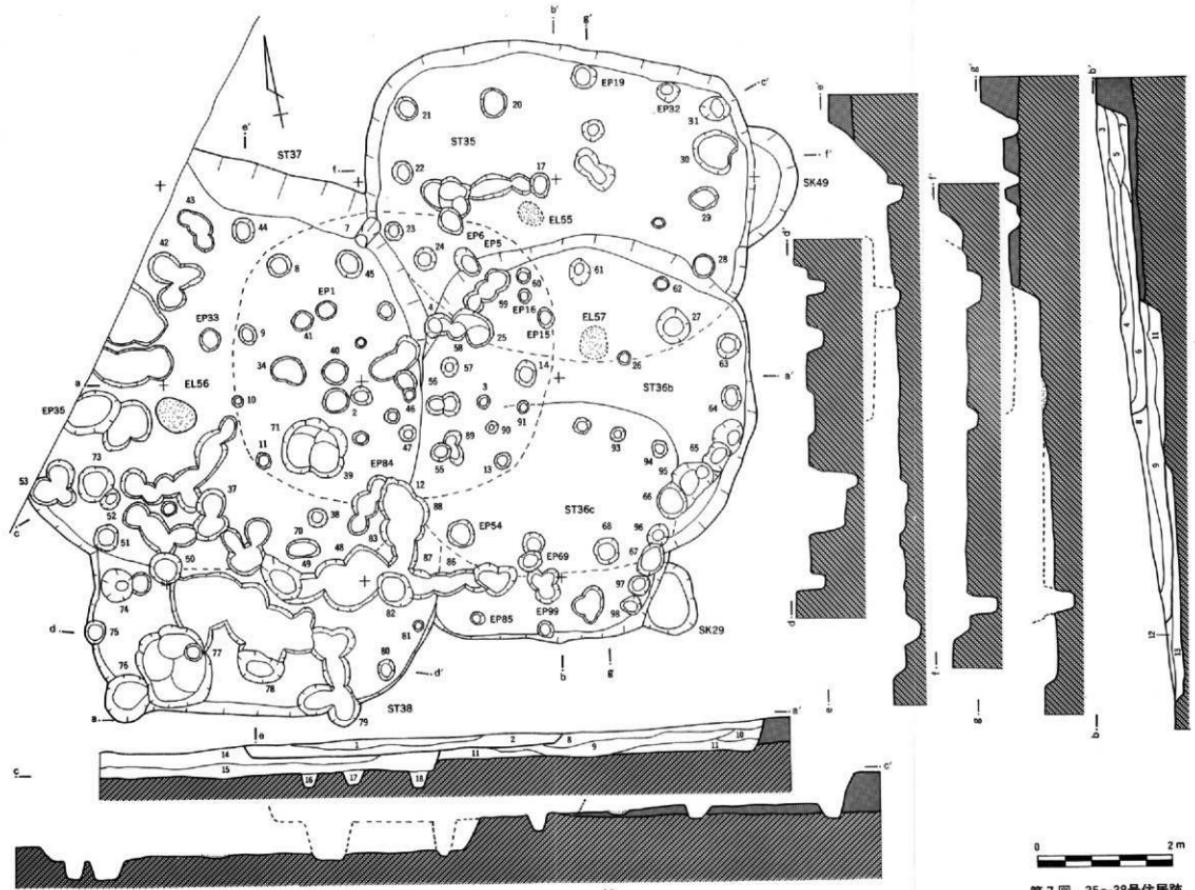
〔36b号住居跡〕

35・36号住居跡の下部で検出された。平面形は、北側と東側が脹らむ不整の方形を呈している。大きさは長軸径5.16m・短軸径5.09mで確認面からの深さは15～32cmである。壁は北側から東側にかけ検出され、緩やかに掘り込んでいる。全体に軟弱であるが北側の中央部がやや堅くなっている。現存する壁の高さは24～30cmである。周溝や壁溝は認められない。床面は炉付近から南東壁にかけて60～80cmの幅で帯状に堅く踏みしめられ、西側では軟弱である。また、住居跡の中央部から南側にかけて暗褐色土で黄褐色土のブロックが多い量に混り、やや堅く踏みしめられている貼り床状になっている。

柱穴は16本検出され、EP54～69である。大きさは径32～59cm・深さ29～42cmで、掘り込みはほぼ垂直になっている。柱穴の配列は、壁付近あるいは壁に沿って巡るように配置している。おそらく支柱穴が主柱穴様に構成しているとみられる。

覆土は、大きく4層に分けられ、北側から南側に流れ込むようレンズ状に堆積し、35・36a号住居跡と重複している覆土層はやや堅くなっている。8層黒褐色土・9層黒褐色土（8層に近似するが色調が明るい）・10層暗褐色土・11層暗褐色土（炭化粒子を多く含む）。

本住居跡の時期は、縄文時代後期の新地式期に相当する。



第7図 35~38号住居跡

[36c号住居跡]

36b号住居跡の精査検出の際に検出され、36a号住居跡の下部に確認される。平面形は、不整の方形を呈し、大きさは長軸径3.60m・短軸径3.42mで確認面からの深さは8~12cmである。壁は南側のみで検出され、緩やかに掘り込まれ軟弱である。周溝や壁溝は検出されない。床面の状態は、中央部がやや落ち込むようになり全体的に軟弱である。

柱穴は、15本検出されE P85~E P99である。大きさは径24~41cm・深さ26~39cmである。配列の状態は、壁および壁際に在りいずれも住居跡の壁に沿って巡っている。炉跡は確認されなかった。

覆土は大きく2層に分けられ、12層黒褐色土（炭化粒子・風化礫粒が含まれ堅い）・13層暗褐色土（炭化粒子・黄褐色土ブロックが含まれ堅い）である。遺物の量は少ない。

本住居跡の時期は、縄文時代後期の新地式期に相当する。

[37号住居跡]

35・36a号住居跡の精査の際に確認され、36a号住居跡の下部に確認され、西側の約半分の地区は未検出である。平面形は、北側および南側の壁や柱穴の配列からみて、不整の長方形を呈するとみられる。大きさは短軸径は6.20m・長軸径は不明である。確認面からの深さは25~72cmである。壁の状態は、緩やかに掘り込んで軟弱である。床面の状態は中央部から北側にかけて若干起伏がみられる他は平坦で、炉跡付近がやや堅くなっている他は軟弱である。

柱穴は、E P33~53で21本確認される。主柱穴はE P35~42で炉跡を中心にして住居跡の中央部に位置し、大きさは径32~64cm・深さ29~41cmである。支柱穴は壁際に沿って配列しており、E P43~53で大きさは径24~53・深さ24~32cmである。

炉跡（E L56）は、住居跡の中央部の南西寄りに位置する地床炉である。大きさは長径62cm・短径50cmで橢円形を示し、若干の掘り込みをもつ。全体的に若干焼成を受けている程度である。

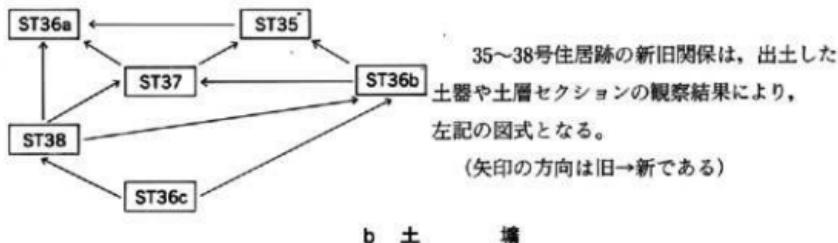
覆土は、大きく2層に分けられ北側からレンズ状に堆積している。14層黒褐色土（炭化粒子や風化礫粒を多量に含み堅い土質）・15層黒褐色土（14層に近似するがさらに炭化粒子が多く含まれる）・16~18層柱穴の覆土でいずれも暗褐色土（炭化粒子・黄褐色土粒子を多く含み軟らかい）である。全体に微砂質土である。

遺物の出土状態は、R R347・348は覆土中層から下層にかけて、住居跡の中央部から正位の状態で出土し、R P346は炉跡付近の床面に伏た状態で出土している。本住居跡の時期は、縄文時代後期の新地式期に相当する。

[38号住居跡]

37号住居跡の精査・検出の際に確認され、全体的な平面形などは不明である。平面形は柱穴の配列状態からみて恐らく方形を呈するとみられ、大きさは、推定で長軸・短軸径とも4.60m前後である。壁は、南側で確認されたのみで緩やかに掘り込まれて軟弱である。床面は、全体に軟弱で凹凸がみられる。周溝・壁溝および炉跡は確認されない。

柱穴は、E P 70~84で15本確認される。大きさは径29~64cm、深さ12~32cmである。本住居跡の時期は、出土した土器からみて縄文時代後期の新地式期に比定される。



5・7~10号土壤 (第3図)

平面形は、いずれも不整円形を呈し、大きさは径55~82cm、深さは35~78cmである。確認面はIV層中である。形態的には共通性があり、断面形が上部が大きく開き中位以下がV字状になり、土層の堆積状態も類似している。時期はいずれも縄文時代後期の新地式期に比定される。8~10号土壤の新旧関係は、8号土壤が新しく、順に9号土壤・10号土壤と旧くなってくる。

11~23号土壤 (第8図 図版27・28)

調査区の中央部の緩傾斜地、14・15・11~13グリッド内に位置し、13・14号土壤や15~17号土壤および18~23号土壤はそれぞれ重複し、20・22号土壤の西側と北側で2号住居跡や1号住居跡と重複している。遺存状態は、上面が桑木の根により多少擾乱しているがおおむね良好である。確認面は、IV層上面で確認される。VI層を掘り込んで壙底としている。

[11号土壤]

平面形は不整円形を呈し、大きさは長径1.00m・短径98cm・深さ49cmである。壁は東側がとくに緩やかに掘り込まれ、壙底はほぼ平坦である。土層は、28層黒褐色土(炭化・風化礫粒が含まれる)・29層暗褐色土(炭化粒子を含み軟らかい)である。遺物の出土は、量的には多くないが、上層よりその大半が出土している。時期は、縄文時代後期の新地式期に相当する。

[12号土壌]

平面形は不整円形を呈し、大きさは長径96cm・短径90cm・深さ58cmである。壁は緩やかに掘り込まれ、壇底はほぼ平坦である。土層は、25層黒褐色土・26層暗褐色土・27層暗褐色土（炭化粒子・黄褐色土粒子を多量に含む）である。時期は縄文時代後期新地式期である。

[13・14号土壌]

平面形は、13号土壌で不整円形・14号土壌で橢円形を呈し、大きさは前者が長・短径とも92cm・深さ31cmで後者が長径1.60m・短径1.10m・深さ39cmである。13号土壌の中央部には中形の深鉢形土器（R P140）が正位の状態で出土している。土層は15層黒褐色土（炭化粒子を多量に含む）・16層黒褐色土・17層暗褐色土・18層黒褐色土（16層より堅い）・19層暗褐色土（炭化・風化粒子を多量に含む）・20層褐色土である。新旧関係は、14号土壌よりも13号土壌が新しい。時期は13号土壌が縄文時代晚期大洞B C式期で14号土壌は新地式期に相当する。

[15～17号土壌]

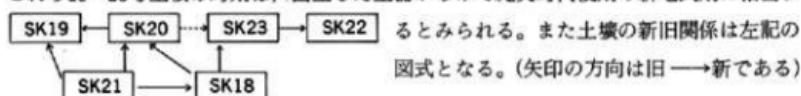
平面形はいずれも不整円形を呈し、大きさは径1.00～1.20m・深さ21～39cmである。壁は緩やかに掘り込まれ、壇底はほぼ平坦である。土層は、21層黒褐色土・22層暗褐色土・23層褐色土・24層暗褐色土である。新旧関係は、16号土壌が新しく順に17号土壌・15号土壌と旧くなる。時期はいずれも縄文時代後期の新地式期に比定される。

[18～23号土壌]

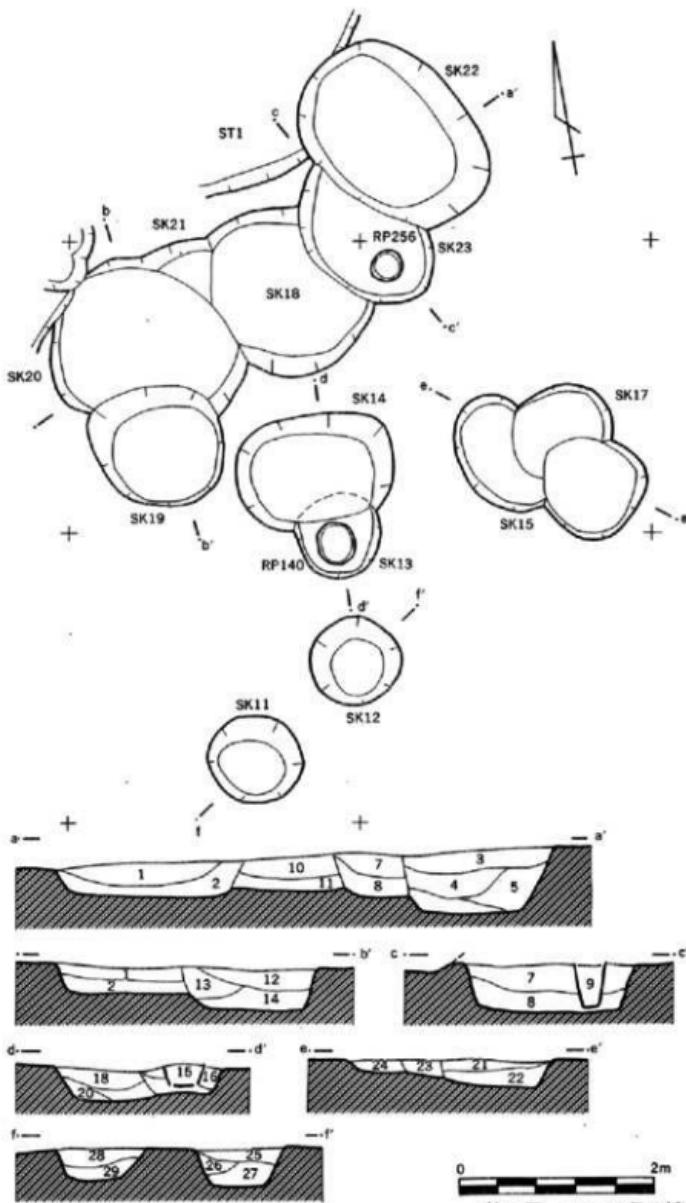
平面形が不整円形を呈する土壌は、18.19.20.21号土壌で、橢円形を呈する土壌は22・23号土壌である。大きさは18～21号土壌は径1.30～1.85m・深さ39～44cmを計り、22号土壌は長径2.10m・短径1.50m・深さ67cmを計る。23号土壌の規模は不明である。

壁の状態は、いずれの土壌も緩やかに掘り込まれ、壇底もほぼ平坦である。23号土壌内出土の深鉢形土器（R P256）は、土壌の南側壁寄りに在りほぼ正位の状態で出土している。これら土壌の土層は、1層黒褐色土・2層暗褐色土（1層より軟らかい）・3層黒褐色土（炭化粒子を多量に含み軟らかい）・4層暗褐色土・5層褐色土・6層褐色土（4～6層には黄褐色土ブロックが含まれる）・7層黒褐色土・8層黒褐色土（いずれも堅い）・9層暗褐色土（炭化粒子や黄褐色粒子が含まれ軟らかい）・10層黒褐色土・11層黒褐色土である。また12層黒褐色土（炭化粒子を含み軟らかい）・13層暗褐色土・14層褐色土である。

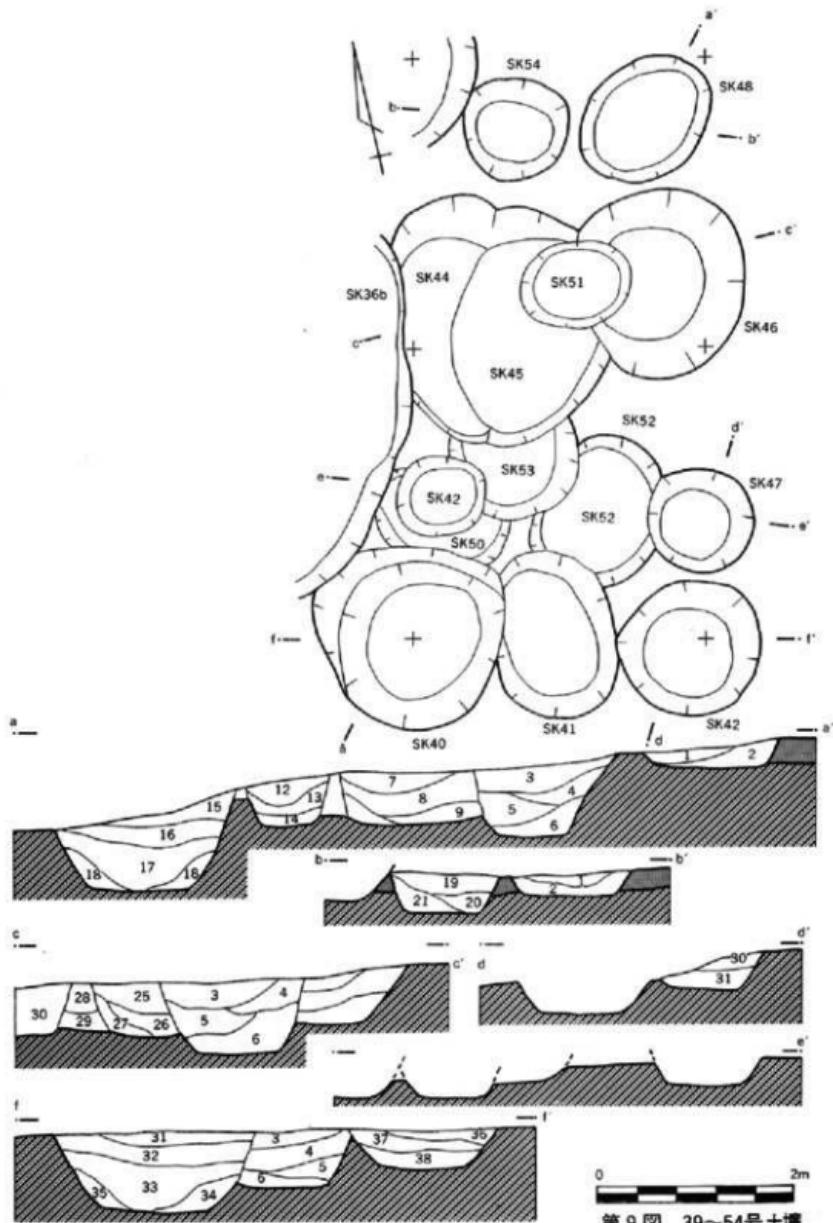
これら18～23号土壌の時期は、出土した土器からみて縄文時代後期の新地式期に相当す



るとみられる。また土壌の新旧関係は左記の図式となる。（矢印の方向は旧→新である）



第8図 17~28号土壤



第9図 39~54号土壤

6・24～27号土壙（第5・6図 図版25・26）

6号土壙はIV層上面で確認され、24～27号土壙は3・4号住居跡の床面精査・検出の際に確認される。平面形は、不整円形を示す土壙は6・24号土壙で、橢円形になるものは25・26・27号土壙である。大きさは6・24号土壙では径1.30～1.40m・深さ24～41cmになり、25号土壙では長径1.60m・短径1.32m・深さ52cmを計る。26・27号土壙は長径1.50m・短径1.10m前後で深さ24～38cmである。壁はいずれの土壙も緩やかに掘り込まれ、壙底もほぼ平坦である。

新旧関係は、24・26・27号土壙は3号住居跡よりも旧く、25号土壙も4号住居跡よりも古い。6・24～27号土壙の時期は、出土した土器からみて縄文時代後期の新地式期に相当するとみられる。

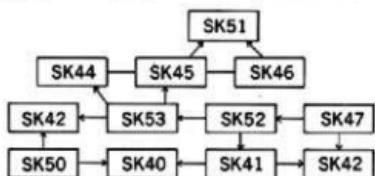
28・29・32号土壙（第4図 図版24）

いずれも1・2号住居跡の床面精査・検出の際に確認される。平面形は、いずれも橢円形ないし不整円形と呈している。28・29号土壙は不整円形で径1.10～1.56m・深さ24～36cmを計る。32号土壙は橢円形を呈し長径2.21m・短径70cmで深さは24～32cmを計り、周囲に礫を配している。これら土壙の時期は縄文時代後期の新地式期に相当する。

39～54号土壙（第9図 図版29・31）

調査区の北東側の傾斜地、18～21・21～24グリッド内に位置し、それぞれ重複している。また西側に隣接して35・36b・36c号住居跡がある。遺存状態は上部が桑木の根による擾乱がみとめられるが、おむね良好である。土壙の確認面はIII層中あるいは、住居跡の床面や壁の精査・検出の際に確認された。

平面形は、橢円形になるものが41・44・45・48・52号土壙で、円形ないし不整円形を呈するものが39・40・42・43・46・47・49～51・53・54号土壙である。壁の状態は、いずれも緩やかに掘り込まれ、上部がオバーハング状になるものが40・44～46号土壙である。また断面形が皿状になるものが42・48・54号土壙である。壙底はいずれの土壙もほぼ平坦で、壁付近でやや傾斜がみられる。時期は縄文時代後期の新地式期に相当する土壙群である。



新旧関係は、39・40・44・49・50号土壙は住居跡の時期よりは古い。その他土壙群との重複あるいは時期の新旧関係は、左記の図式のとおりである。

（矢印の方向は旧→新である）

2 遺 物

a 土 器

出土した土器は整理箱で約130箱を数える。うち、完形土器あるいは復元実測可能なものは約40個体程で他は小片である。土器分類は包含層出土およびS T35~38覆土出土土器を中心に完形土器を含め概略的におこなった。

第I群土器 (図版1-1・図版9-188)

繩文時代前期、1は大木6式併行である。188は羽状繩文の深鉢で胎土に纖維を含む。

第II群土器 (図版1-2・図版7-138)

繩文時代中期、燃糸圧痕で口縁部に縦位並列、連弧文が描出される。大木7b式併行。

第III群土器 (図版1-3~10)

繩文時代中期、隆帯による渦巻文が文様主体となる。大木8b式併行。

第IV群土器 後期未葉の土器。本遺跡の中心をなす一群で、所謂「コブ付土器様式」で把えられる。土器の型態あるいは描出されたモチーフから土器型式を意識して分類したが、全体の型式やモチーフが判然としないものも多数あり、認識に誤りがある場合も考えられる。なお、基本的には安孫子氏(1969他)の設定した形式・段階に拠っている。

1類 (図版2-21~31) 沈線により孤線連結文が描出される。A II型式と明確に認められるものは21・24・27・28、B II型式は25・26・29・31である。21については第10図01・表-3参照。23はやや入組文的因素をもつ。22・27は孤線連結文をモチーフとしているようだが判然としない。24・30・31はコブを伴わない。またB II型式の25・26・29・31は口縁部に文様帶が凝縮されている。23はコブ付土器第IV段階、他は第II段階とみられる。

2類 (図版2-33~38) 孤線連結文の範疇で把えられ、モチーフ内に繩文の充填がみられるもの。器形は深鉢だが型式は小片のため不明な点が多い。モチーフの展開から、基本的には孤線連結文の祖型、第I段階と考えられる。

3類 (図版3-41~52) 入組文が描出される。モチーフ内は繩文で充填される。44・45・47~52がA II型式、41はB II型式である。41は完形土器06(第10図)と共に、時期的にやや新しい。51はモチーフ内の羽状繩文、コブ貼付の認められないことなどにより古いタイプ(第II段階)か。他は第IV段階で把えられよう。41は大洞B式。

4類 (図版3-53~57) 入組文モチーフを刻目で充填する。モチーフは、沈線で区画される53、隆帯の貼付による54・55、刺突文風に刻目自体で表現される56・57等の手法の違いが認められる。A II・B II型式で第IV段階。

5類 (図版3-58~64・11図08) 平行沈線内にコブが連続的に貼付される。モチーフ外を磨消す59・64、全体を研磨する58・60・62・63、繩文を残す61等の手法がみられる。

器形が判然とするのは60でA II型式である。第III段階～第IV段階か。

6類（図版4-65～68・11図07） 沈線により綾杉状あるいは斜方向の平行沈線文様が描かれる。綾杉状文の上下平行沈線間に連続的にコブの貼付される65・67、口縁部に限定され、格子状の沈線と組合せがみられる66、斜方向の平行沈線に口縁部に突起をもつ68などがある。いづれも地文は無文である。5類と関連づけられよう。

7類（図版4-69～71） 小コブとの組合せでボタン状のコブが貼付される。69は入組文、71はLR繩文地文に沈線文様が描出される。第IV段階と考えられる。

8類（図版4-72） 口縁部付近の小片。隆帯による橢円形の枠状文が構成される。恐らくコブの貼付もみられよう。第IV段階。

9類（図版4-74～81） クランク状のモチーフが描かれる。74・80はモチーフ内が磨消され、逆に75～79・81はモチーフ内に繩文が残る。前者はコブがみられず後者とは時期的に差があるものと考えられる。コブはクランクの曲り角を中心にはじめられる。80はA II型式であるが、他については判然としない。第II段階であろう。

10類（図版4-73） 無文の深鉢口縁部にコブが貼付される。

第V群土器 三叉状入組文、玉抱き三叉文、魚眼状入組文等が描出される。

1類（図版5-82） 小波状口縁をもつ深鉢。文様帶は口縁部に凝縮され、文様は三叉文からK字状文への過渡期のものとして把えられる。大洞B₂式。

2類（図版5-83・85～88） いわゆる三叉文が描かれる。隆帯によるX字状文との組合せのみられる83、入組文との組合せの85・86の他、口縁部突起八の字状沈刻下位に描かれる87・88等がある。大洞B₁式。

3類（図版5-90） 入組部接点に三叉文が施される。時期同上。

4類（図版5-84・89） 玉抱き三叉文だが5類に近いもの。時期同上。

5類（図版5-91） 魚眼状入組文の施されるもの。時期同上。

第VI群土器 注口土器。文様により分類する。

1類（図版5-92～98・12図031） 基本的には器面が研磨され無文となる。コブがつくもの、口縁部に沈線の横走するもの、繩文帶を有するもの等がある。繩文後期末。

2類（図版6-119・第11図09-012～014） 羊齒状文の系統。表-3参照。大洞B C₂。

第VII群土器 壺形土器。文様・地文により分類する。

1類（図版5-99～101・12図027） 器面全体が研磨され無文となるもの。

2類（12図025・026） 口縁部無文、体部繩文地文（綾縞・羽状）。表-4参照。

3類（12図023） 沈線で菱形文が描出される。表-4参照。

第VIII群土器（図版6-102～110・12図-13図-032～037） 粗製の深鉢を一括する。器面

がハケ目で調整される102・103、縹文地文の104～106、図034・035、網目状捺糸文が施される107・108、格子目状沈線の109、無文の110・図032・033・036・037等に分けられる。時期的には後期末から晩期初頭であろう。

第IX群土器 羊齒状文の描出される深鉢・浅鉢。第VI群2類と関連づけられる。

1類(図版6-112・113) 入組三叉文から発展した羊齒状文の祖形的なもので入組部が連続する。113は多量の炭化物が付着している。大洞BC₁式。

2類(図版6-114・115) 末端のかみ合う右下りの羊齒状文。体部はL R縹文に綾縞文が伴う。大洞BC₂式。

3類(図版6-116・117) 末端のかみ合わない右下りの羊齒状文。大洞BC₂式。

4類(図版6-118・121) かみ合う部分が平行化したいわゆる珠子文。大洞C₁式。

5類(図版6-120) 皿型土器。全体の文様構成は不明。大洞BC₂式か。

6類(11図010) 表一4参照。文様は第VI群2類に共通する。大洞BC₂式。

第X群土器(図版7-122～132・11図06) 雲形文に代表される一群を一括。大洞C₁式。

第XI群土器(12図021・022・028～030) 粗製の鉢を一括する。器形にバリエーションがある。表一4参照

第XII群土器(11図015) 平行沈線が口縁部に横走する。大洞A式。表一4参照。

第XIII群土器 底部を一括する。

1類(11図017) 底部多孔。 2類(11図018～019) 網代圧痕。 3類(11図020) 木葉痕。 4類 簾状圧痕。

表一2 土器片出土地一覧

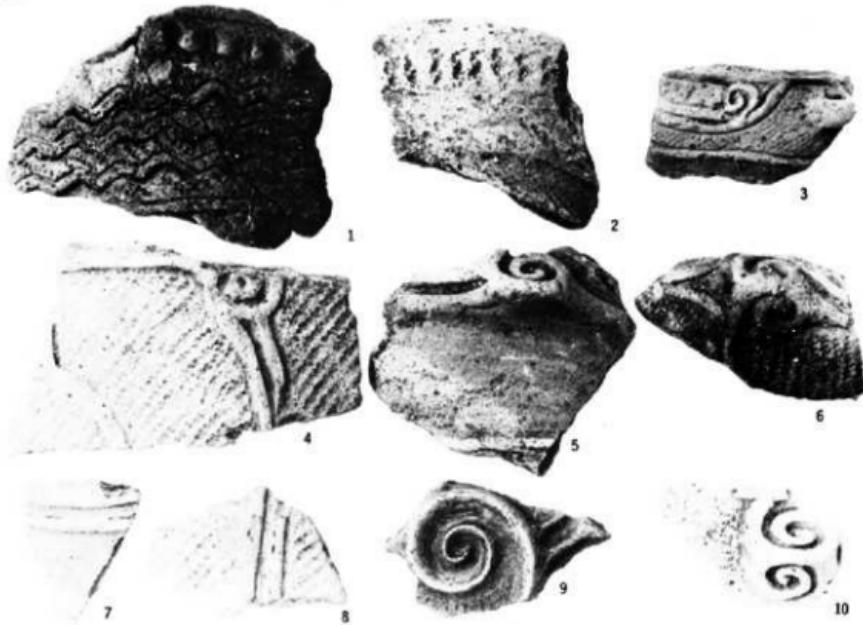
番号	出土地	番号	出土地	番号	出土地	番号	出土地	番号	出土地	番号	出土地	番号
1	27-20 B	30	19-18 II	65	S T2 F	88	16-22 II	117	S T3 F	146	S T4 Y	175 S K22 F
2	S T3 Y	31	S T38 F _{c=2}	66	X-O	89	S T35 F	118	S T37 F	147	S T1 Y	176 S K23 F
3	X-O	32	S T36 b F	61	S T36 b F	90	20-22 II	119	S T37 F	148	S T1 F	177 S K25 F
4	26-18 B	33	X-O	62	X-O	91	S T35 F	129	16-22 II	149	S T1 Y	178 S K29 F
5	22-18 B	34	13-15 I	63	20-22 II	92	S T37 F	121	S T37 F	150	S T1 F	179 S K27 F
6	25-19 B	35	S T35 F _{c=2}	64	S T35 F _{c=2}	93	S T37 F _{c=2}	122	19-22 II	151	S T1 F	180 S K29 F
7	22-18 B	36	23-19 II	65	S T37 F _{c=2}	94	S T37 F _{c=2}	123	19-22 II	152	S T1 F	181 S K22 F
8	23-28 B	37	22-19 II	66	23-20 II	95	S T37 F _{c=2}	124	19-22 II	153	S T1 F	182 S K40 F _{c=1}
9	27-26 B	38	S T35 F	67	S T36 b F _{c=2}	96	S T36 b F _{c=2}	125	20-24 I	154	S T1 F	183 S K41 F _{c=1}
10	27-21 B	39	S T36 b F	68	S T32 F _{c=2}	97	S T36 b F _{c=2}	126	16-22 II	155	S T1 Y	184 S K42 F _{c=1}
11	S T25 F	40	13-17 II	69	S T32 F _{c=2}	98	23-19 II	127	S T37 F _{c=2}	156	S T1 Y	185 S K43 F _{c=1}
12	S T25 F	41	23-25 II	70	S T32 F _{c=2}	99	S T37 F _{c=2}	128	15-19 II	157	S T1 F	186 S K44 F _{c=1}
13	S T25 F	42	S T2 F EP	71	27-21 II	100	S T37 F _{c=2}	129	20-16 II	158	S T1 F	187 S K44 F _{c=1}
14	S T25 F	43	S T36 b F EP	72	S T32 F _{c=2}	101	S T37 F _{c=2}	130	18-22 II	159	S T1 F	188 S K45 F _{c=1}
15	S T27 F _{c=2}	44	S T38 Y	73	19-19 II	102	S T37 F _{c=2}	131	19-25 I	160	S T1 F	189 S K45 Y
16	20-23 I	45	S T36 c F _{c=2}	74	S T25 F	103	S T36 b F _{c=2}	132	X-O	161	S T1 F	190 S K45 Y
17	20-22 II	46	S T36 b F _{c=2}	75	S T36 b F _{c=2}	104	S T37 F _{c=2}	133	S T1 Y	162	S T1 F	191 S K46 F _{c=1}
18	S T37 F _{c=2}	47	20-18 II	76	S T36 b F _{c=2}	105	S T36 b F _{c=2}	134	S T1 Y	163	S T1 Y	192 S K46 F _{c=1}
19	20-23 B	48	X-O	77	19-22 II	106	S T37 F _{c=2}	135	S T1 Y	164	S T1 F	193 S K46 F _{c=1}
20	21-19 B	49	S T27 F	78	19-19 II	107	S T36 b F _{c=2}	136	S T1 Y	165	S T1 Y	194 S K46 F _{c=1}
21	S T27 F _{c=2}	50	S T36 b F _{c=2}	79	19-19 II	108	S T37 F _{c=2}	137	S T1 F	166	S T1 Y	195 S K46 F _{c=1}
22	S T27 F _{c=2}	51	S T35 F _{c=2}	80	S T35 F	109	S T35 F	138	S T3 F	167	S K8 F	196 S K46 F _{c=1}
23	X-O	52	20-22 II	81	18-22 II	110	S T37 F _{c=2}	139	S T3 F	168	S K14 F	197 S K47 F _{c=1}
24	S T27 F _{c=2}	53	18-19 II	82	S T25 F	111	S T37 F _{c=2}	140	S T3 Y	169	S K15 F	198 S K49 F _{c=1}
25	S T38 F _{c=2}	54	20-11 II	83	S T35 F	112	S T37 F _{c=2}	141	S T3 F	170	S K18 F	199 S K49 F _{c=1}
26	S T38 F EP	55	19-20 II	84	S T35 Y	113	S T37 F _{c=2}	142	S T3 F	171	S K18 F	200 S K49 F _{c=1}
27	S T36 b F _{c=2}	56	19-15 I	85	S T37 F _{c=2}	114	S T37 F _{c=2}	143	S T3 EP	172	S K22 F	201 S K52 F _{c=1}
28	X-O	57	21-19 II	86	S T37 F _{c=2}	115	S T37 F _{c=2}	144	S T4 Y	173	S K22 F	202 S K51 F _{c=1}
29	S T36 b F _{c=2}	58	S T36 c F _{c=2}	87	S T35 F	116	18-22 II	145	S T4 Y	174	S K22 F	203 S K52 F _{c=1}

番号は図版1～10の各土器番号と一致する。

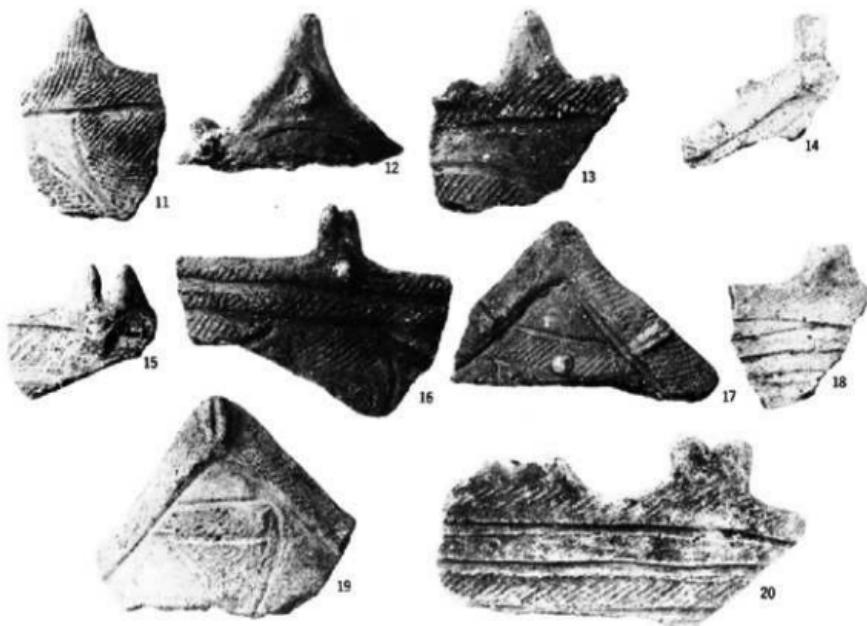
包含層出土土器は、20-20(グリッド番号) I・IIは第I層あるいは第II層出土を示す。

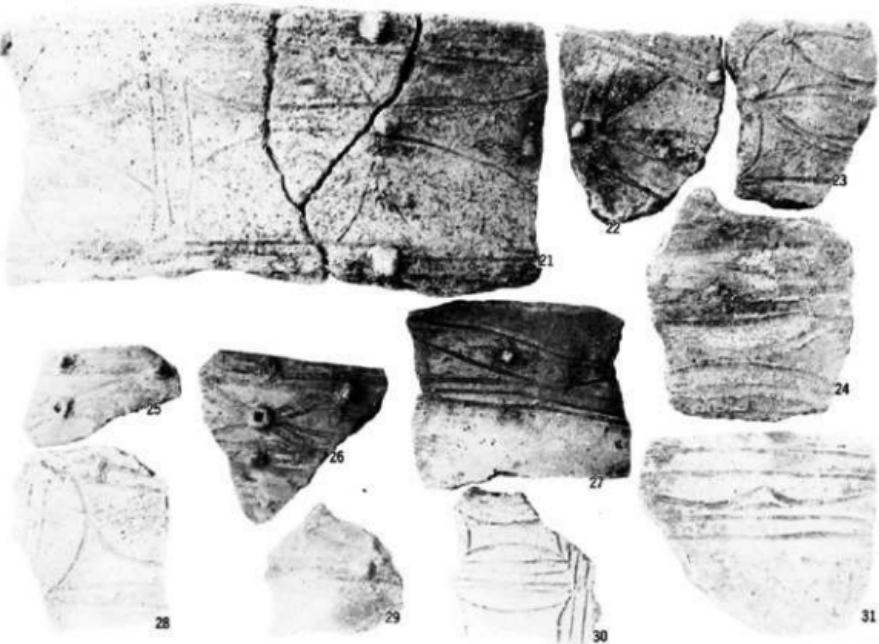
遺構内出土土器は、S T(窓穴住居) S K(土壙) E P(ピット) さらに、Fは覆土、Yは床面・底面である。

出土地点不明なものは X-O で示した。

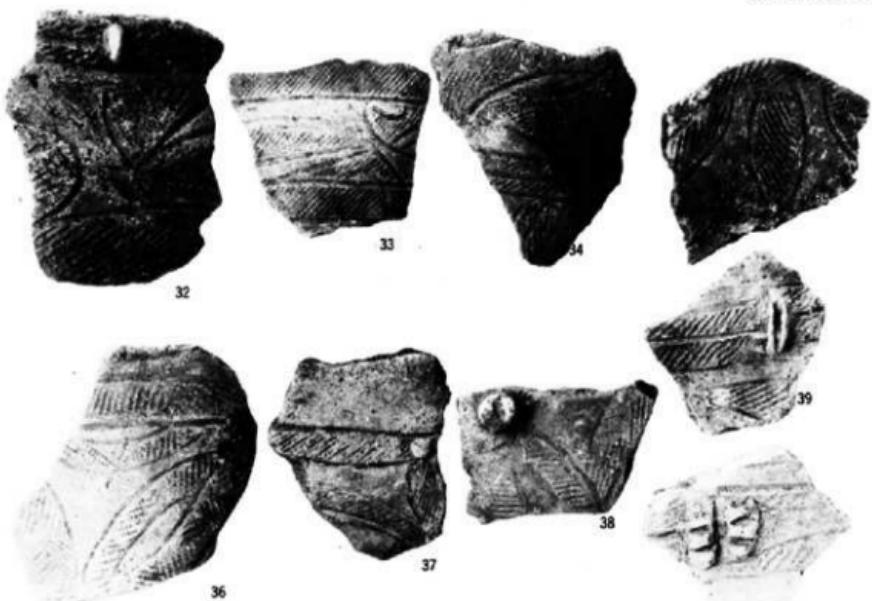


第Ⅰ群・第Ⅱ群・第Ⅲ群土器

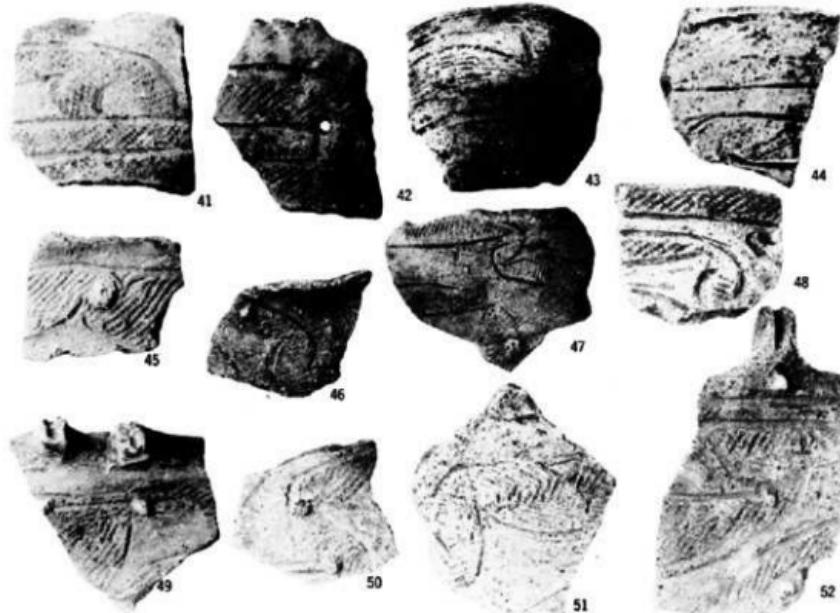




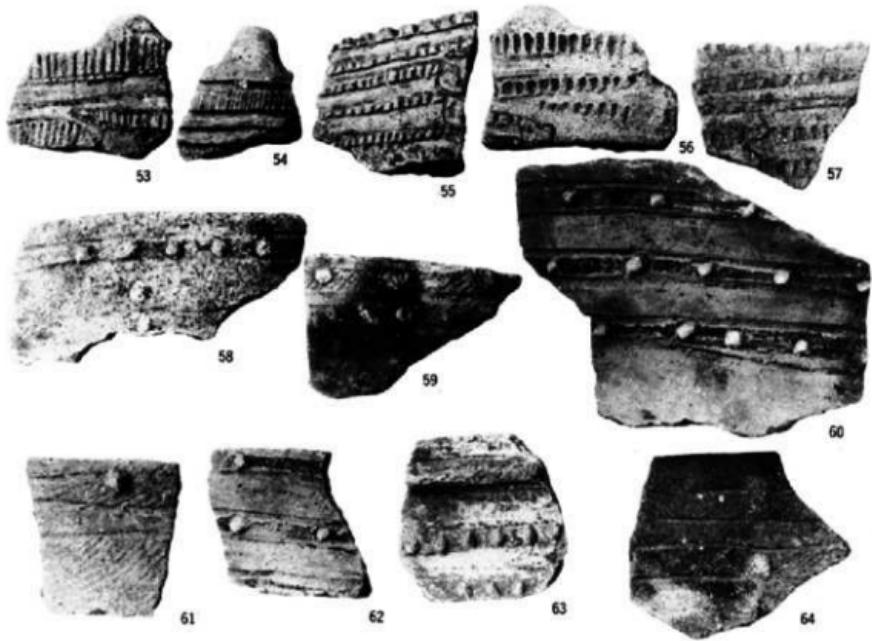
第IV群 1類土器



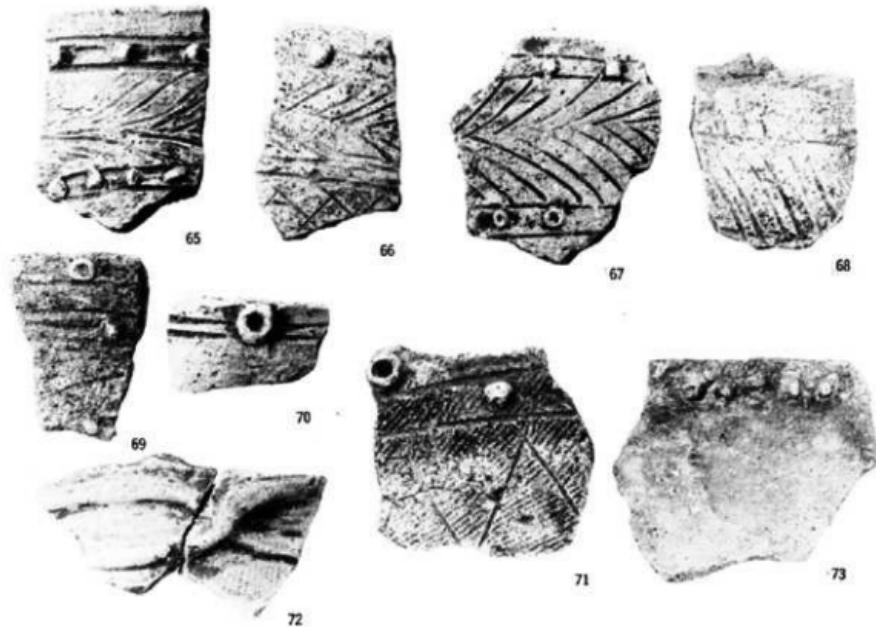
第IV群 2類土器 (39・40を除く)



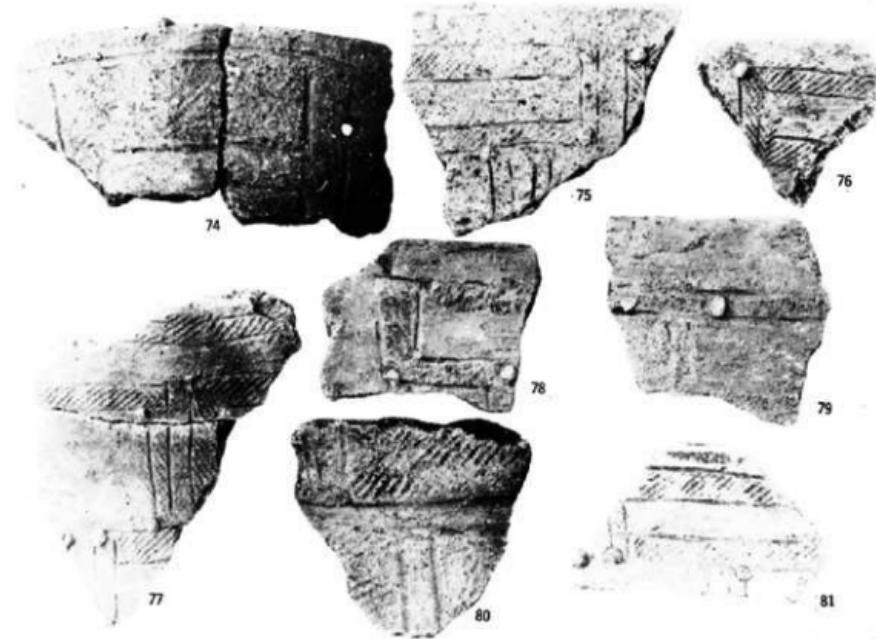
第IV群 3類土器



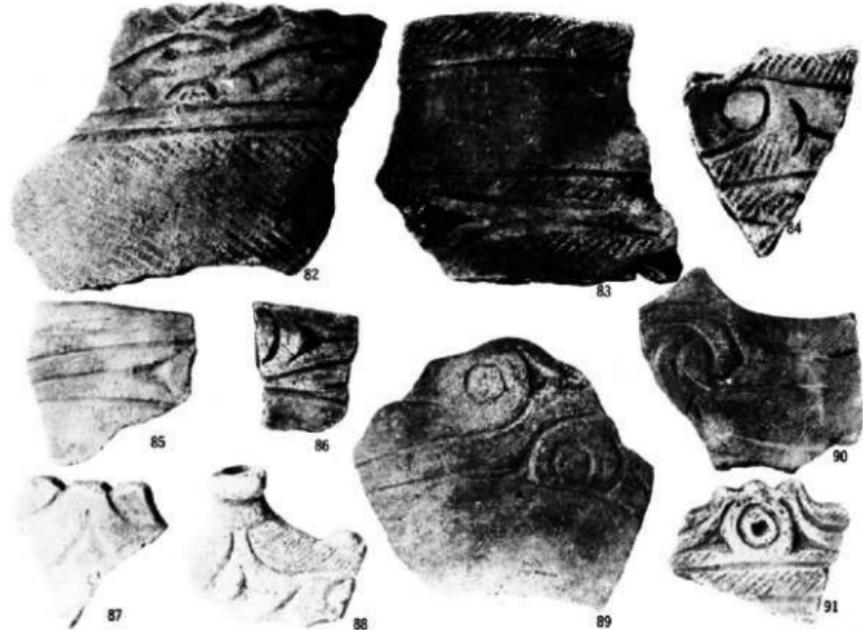
—32— 第IV群 4類土器 (53~57) 同 5類土器 (58~64)



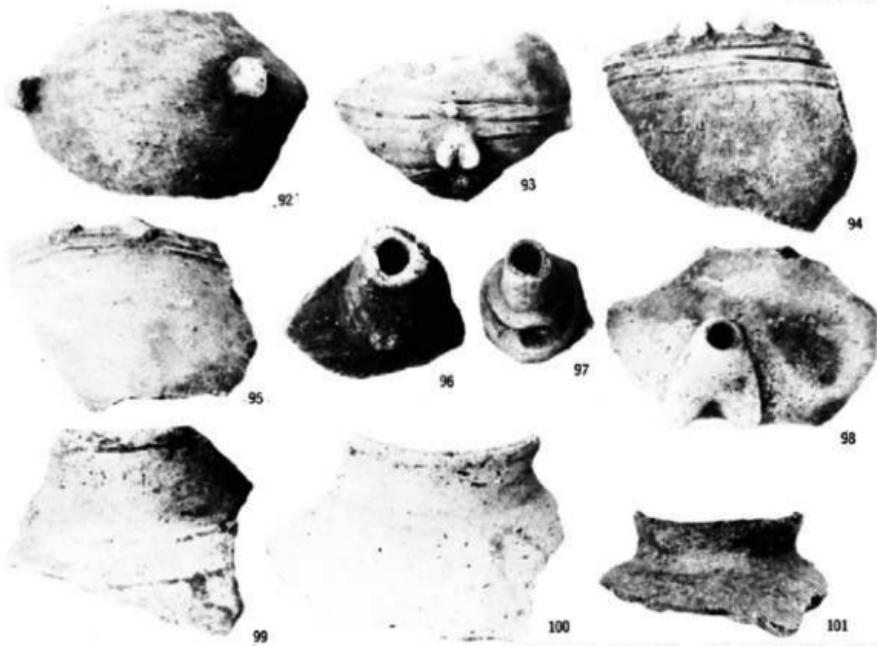
第IV群 6類土器 (65~68) 同7類土器 (69~71) 同8類土器 (72) 同10類土器 (73)



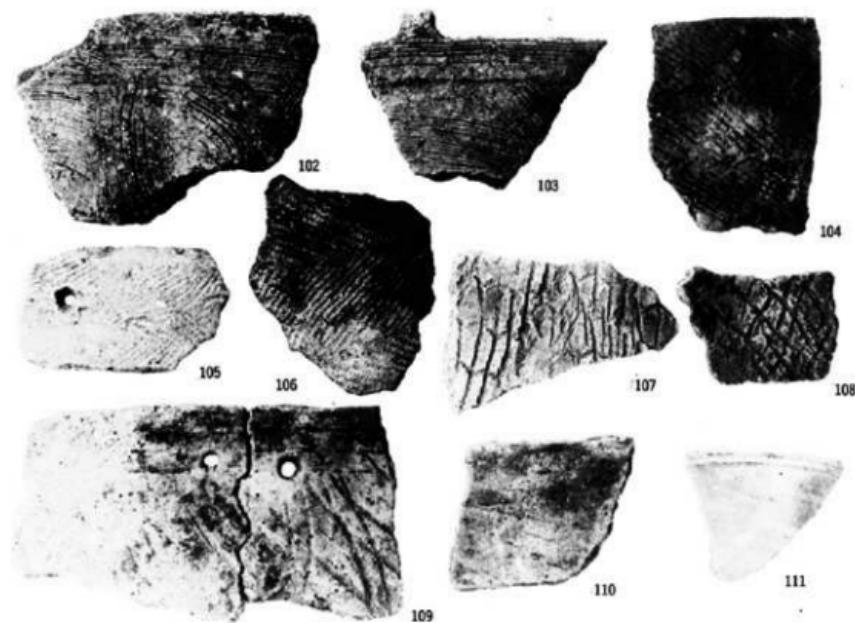
第IV群 9類土器 (74~81)



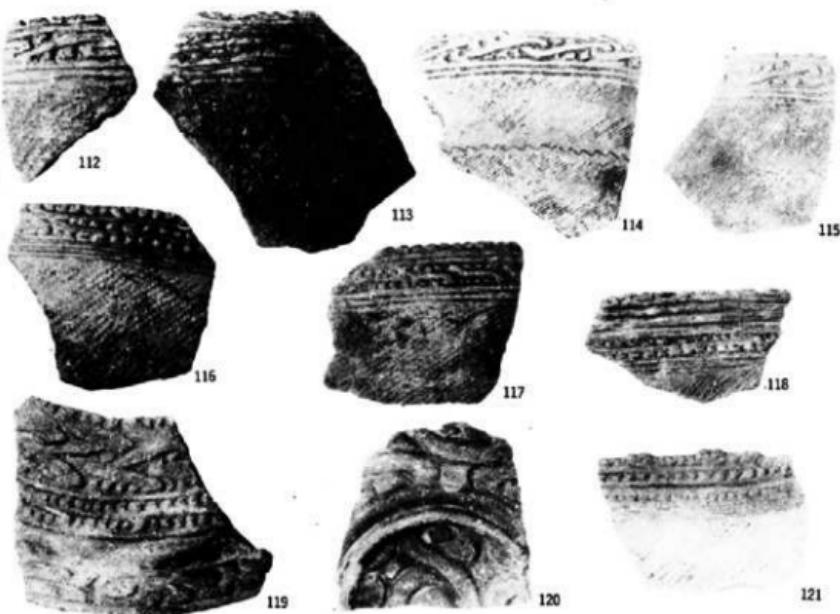
第V群土器



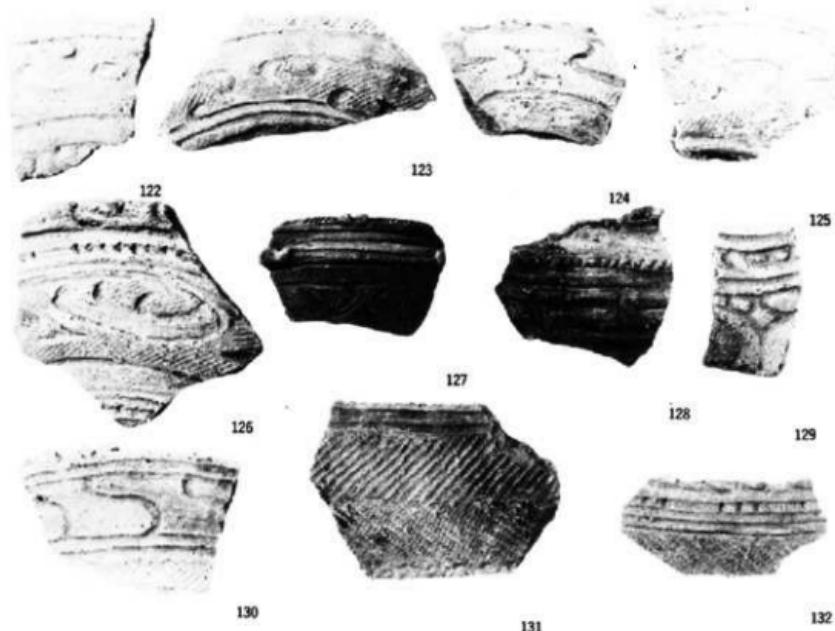
第VI群土器 (92~98) 第VII群土器 (99~101)



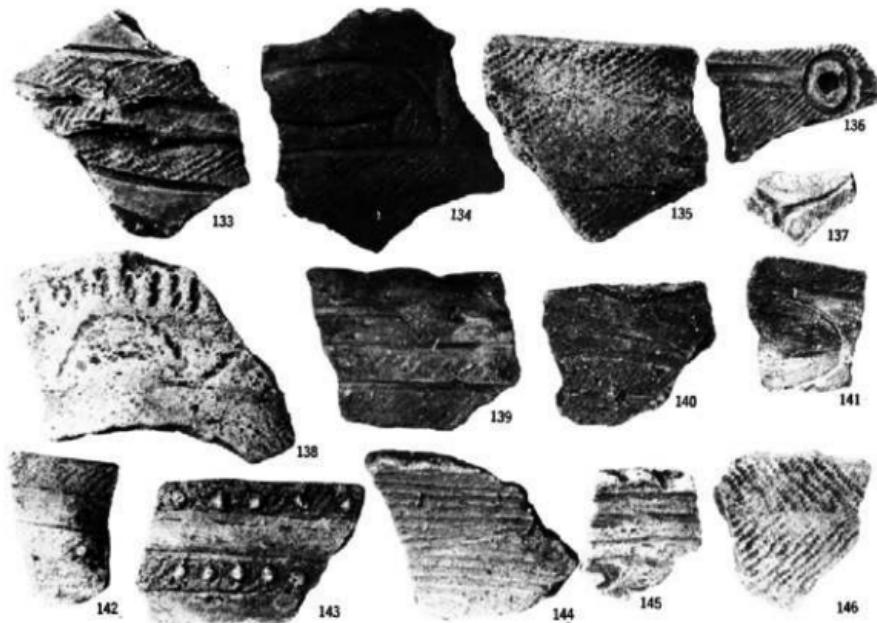
第VIII群土器

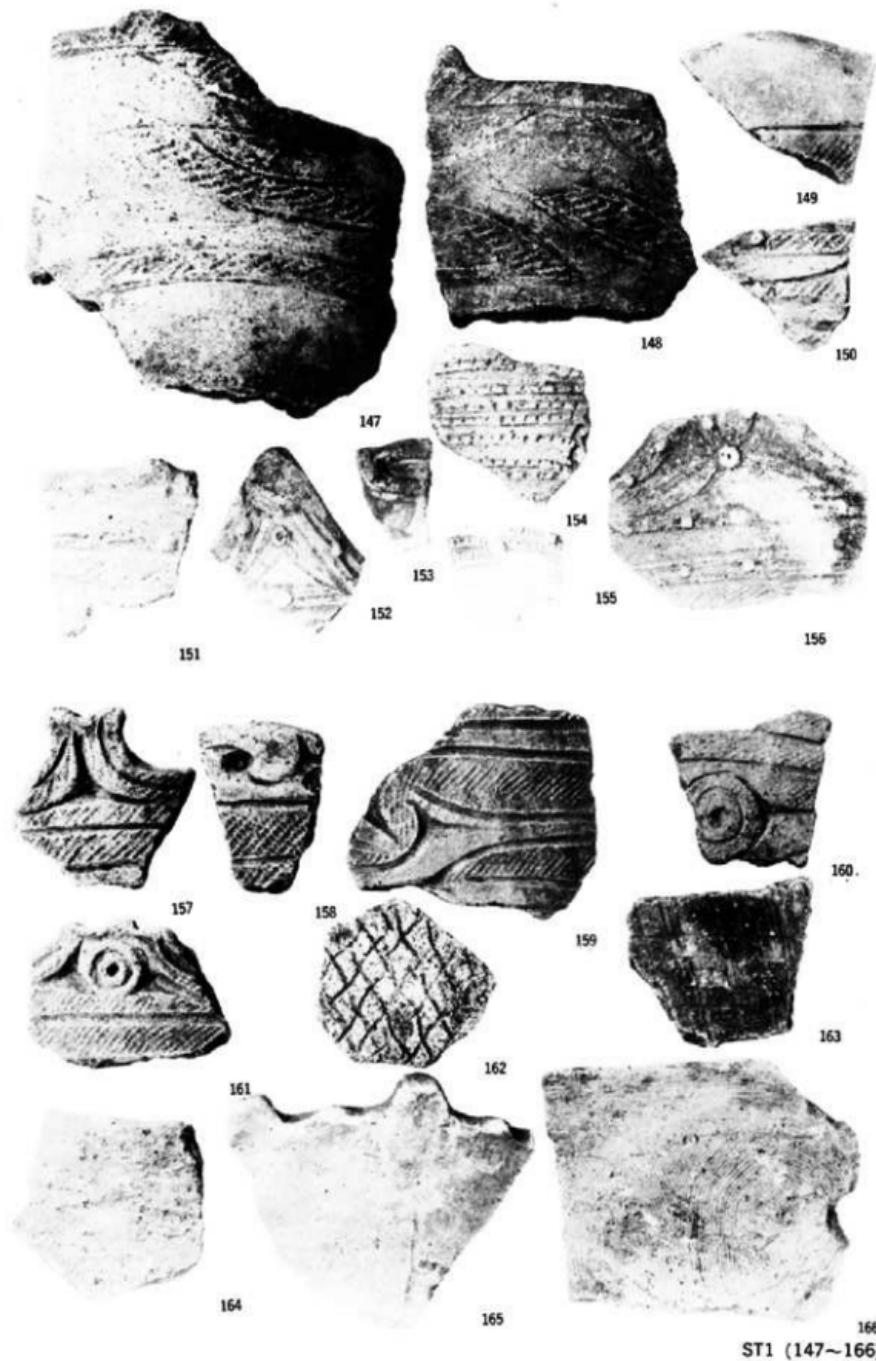


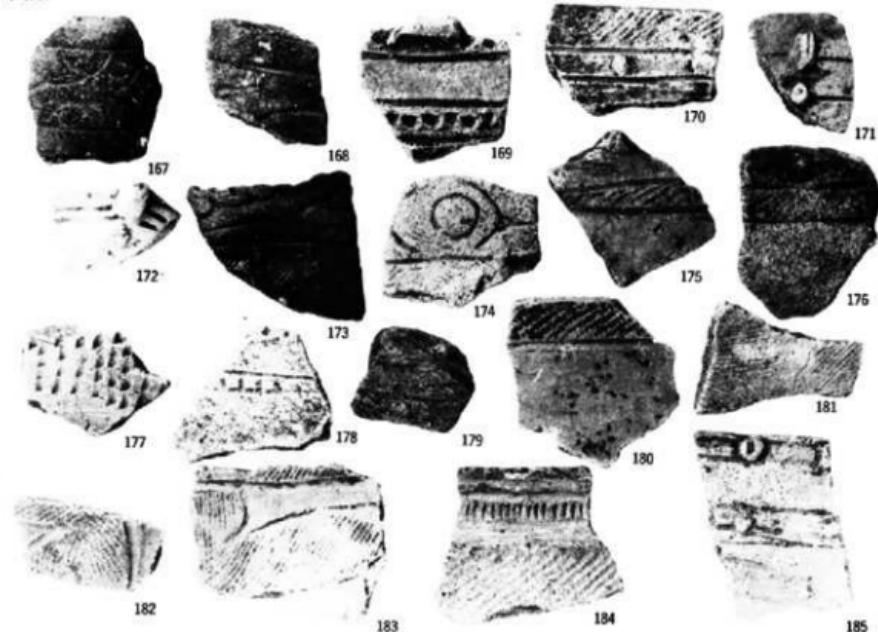
第IX群土器



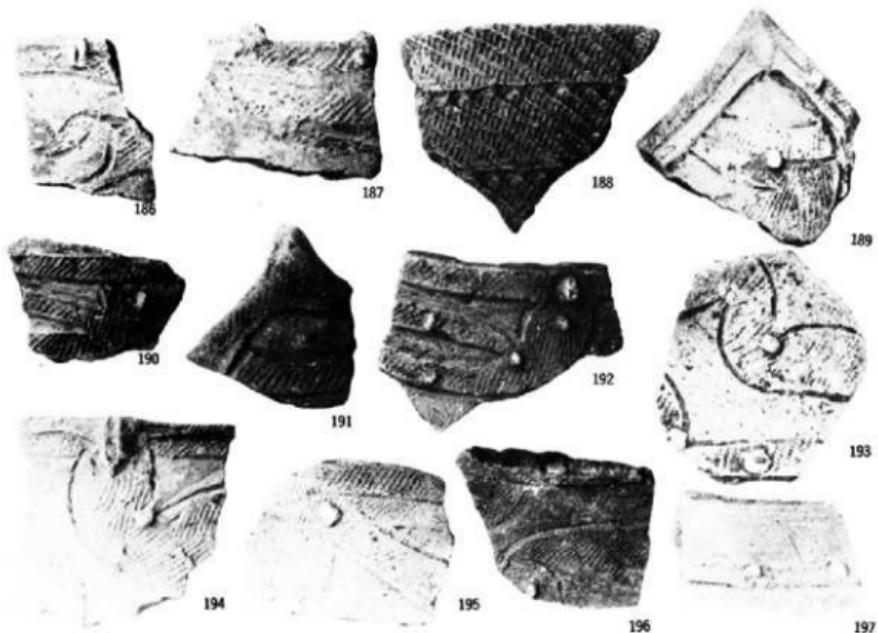
第 X 群土器







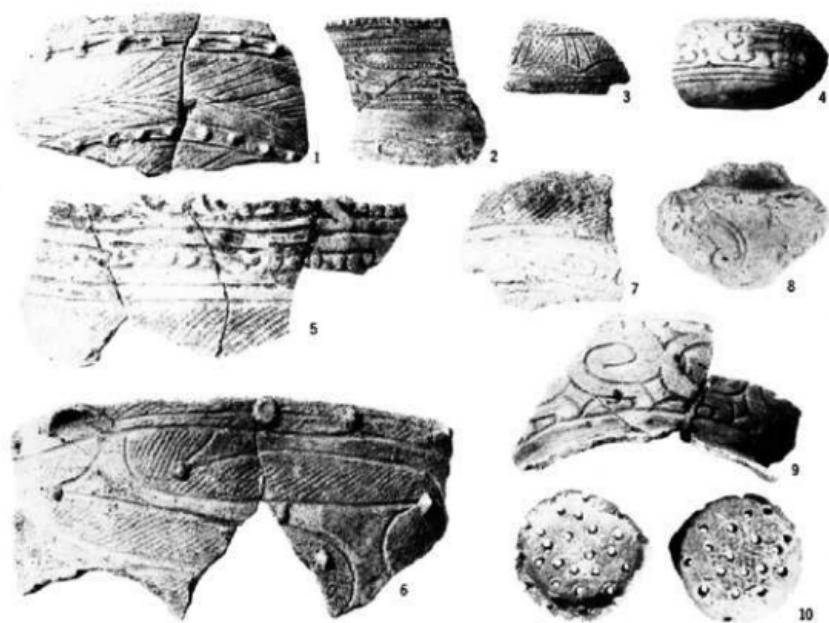
土壤出土土器（1）



土壤出土土器（2）



土壤出土土器 (3)



一括土器

b 完形土器

本遺跡から出土した完形土器、復元実測可能な土器は約40個体程である。うち実測図掲載資料は37個体、これらについては、表-3で各項目ごとに一覧表にしてまとめた。

完形土器は遺構内出土の他、包含層および遺構覆土と考えられるがプラン未確認のためグリッドで取りあげたものなどがある。

分類については完形土器を含めての土器片の分類に従い、第I群1類土器はI-1と簡略化して記載した。

時期的には縄文時代後期末から晩期中葉が主体で、特にコブ付土器から大洞BC₂式にかけての資料が多い。また、器種もバラエティーに富んでおり、該時期の土器様相を知る上で有効な資料となろう。

なお、実測図・図版とも縮尺は基本的には4分の1である。縄文原体については土器片同様に施された方向で示した。

表-3 実測土器観察表

器番号	器種番号	器形	三形・文様の特徴その他	出土地	器高	口径	最大径	底径	分類	備考
1000 01	2-21	深鉢	体部以下欠損。縁部がくびれ、体部上半に唇大径をもつ。口・文様帶には横縞と縦縞を含むモチーフとする文様が模索され、さらにモチーフ部位の組合せにより複数にコブが貼付される。	S T37 F 2	(10.0)	32.0	—	—	IV-1	コブ付土器A II型式第II回復
1005 02	19-3	蓋	蓋部の心面と考文される。横縞する上下2本の縫の平行弦状間に瀬波文が施され、その範囲に斜めに複数の縫が入る。用途はL型瓶。	S T35 F 1	(4.9)	12.5	12.5	—	IV	
1005 03	19-2	深鉢	小形の深鉢。口縁部がひらく、体部で1度すぼまり底部に向かう。口・文・文様帶を有する。口・文・文様帶とも右下の入鉢が模索される。口・文・文様帶ではモチーフ内に前田目が施され、口・文・文様帶では瀬波文文上に沈線で複数の縫合を入れて瀬波文が施される。	20-18G II	(7.2)	11.0	11.0	—	IV-4	コブ付土器A II型式第IV回復
1006 04	19-6	II	体部以下欠損。縁部で1度すぼまりの形と考文される。II-文・文様帶に入鉢が施され、体部欠損。口縁部に貼付されるコブは「耳鉢」のもの、やや大型のもの、小形のものと複数の形がある。入鉢内に貼付されるのは口・文・文様帶である。	S T35 F	(10.0)	32.0	—	—	IV-3	コブ付土器A I型式第III回復
1006 05	II-1	II	小形の深鉢。口縁部・体部欠損。II-文・文様帶と口・文・文様帶の間に複数の縫が施され、工具先端による長縫の横縫剥削痕が施される。II-文・文様帶は内側からL型瓶で充填される入鉢部のひだにコブが貼付される。やはり入鉢部にコブが貼付される。	S T37 F	(8.0)	(13.0)	—	—	II	コブ付土器A I型式第IV回復
1006 06	II-9	II	う型の深鉢口縁部もつ。II-文・文様帶の入鉢部形状は左アリで、底状口縁部に応じて2段位で構成される。入鉢部の各部位にはモチーフ内に円形文・文様帶が模索される。モチーフ内はL型瓶で充填され、体部は口・文・文様帶が施される。また、口縁部のひだには縫合による互接部三叉式のモチーフがある。	15-18G II	47.4	38.0	38.0	11.0	II	コブ付土器A I型式第IV回復
1100 07	II-1	II	縫合欠損。II-文・文様帶に模索による横縫剥削痕が右回転され、縫合部にモチーフが施される。II-文・文様帶内にはコブが貼付される。縫合部は左下に縫合するものと考文されるが縫合から後の復元実測のため平面的な点がある。	S T37 E P	(9.0)	25.6	—	—	IV-6	コブ付土器A II型式第II回復(?)
1100 08	II-7	II	縫合欠損。口縁部に2個と右の部が4個つく。縫合は体部でくびれをもつ。口縁部には5段の平行弦状が構成される。比較的内側から系統的にコブが貼付される。コブは基本的に縫合に並ぶようである。コブの位置、モチーフ内はL型瓶で充填される。	S T37 Y	(16.0)	28.0	—	—	IV-5	コブ付土器A II型式第II回復(?)
1100 09	II-2	口鉢	口縁部が内側し、さらに底面のU縫がつく。文縫は半周文縫の系統で構成されるよう。体部最大径部に2個1対の舟状突起が漸進的に全周する。底面は底面。	S T36A F	(11.0)	—	23.0	—	IV-2	大洞BC ₂ 式
1100 10	II-7	幕	縫合でくびれ口縁部がひらく。口縁部には小突起がつけられ開口し、さすがに底面に複数の縫合がある。2次底形成を意味した上部はもろい。縫合部には多量の復元物が付着する。	S T36A F	(7.5)	20.4	20.4	—	IX-6	大洞BC ₂ 式
1100 11	II-5	深鉢	体部以下平欠損。口部に横小開縫。小突起が違う。主要モチーフは上から五段の指くよう入鉢文が大的基本的には半周文縫からの発展形であろう。体部はL型瓶である。	S T36A F	(9.0)	21.4	—	—	IX-6	大洞BC ₂ 式
1100 12	II-4	口鉢	口縁部・底面下平欠損。主要モチーフは忍冬半周文縫の文縫が模索され、上半の入鉢部は半周文縫からの変形モチーフであろう。	S T36A F	(4.0)	—	14.2	—	VI-2	大洞BC ₂ 式

種類	器物番号	通巻	形態・文様の特徴 その他の	出土地	高さ	口径	最大径	底径	分類	備考
1158 013	注口	口縁部・脚部欠損。口縁部は内面しながら立ち上がる。さらに頂状部が付いており、内部は内側に張り出た大きな袋足状である。形状が複雑である。この形状では大柄とみなされるカビカルな字学説の初期段階のものといふよう。	S T6a F	5.7	—	20.8	—	VI-2	大柄BC式	
1158 014	II-9	# 体部欠損。口縁部は圓錐状文様が施されている。脚部は上部が円柱形、腰帯部の下部を平底状に変化させている。口縁部には等距に二つの凹起部がつづけられる。	S T6a F	8.0	20.6	—	—	#	大柄BC式	
1158 015	II-4	口縁部欠損。口縁部は上部が円柱形で腰帯部が變化している。口縁部付近にコブがつく。脚部は等距に二つの凹起部がつづけられる。	23-BG H	(10.2)	—	—	5.9	VII	大柄A式	
1158 016	II-8	口縁部に3つの凹起部が施され、脚部の心底部には腰帶文が施されている。腰帶文は基本的には3段階である。地紋には細かい横のL字彫文が施され、モチーフ内には腰帶文が施されている。	26-BG I	5.4	23.4	23.4	12.0	X	大柄C式	
017	10-10	底部穿孔部の17孔認められる。体部は圓文文、腰帶部底。	S T2E	—	—	—	5.5	VII-1	—	
018	#	底部穿孔部。細かい模様できまる脚・腰帶部のみ認められる。	S T2F	—	—	—	6.6	VII-2	—	
019	#	底部穿孔部底。	S K18	—	—	—	7.6	#	—	
020	#	腰帶部本革底。	S T2F	—	—	—	7.0	VII-3	—	
1258 021	II-11	平口縁で体部は圓文文様。横位に2段腰帶が施文される。体部下半は斜りにより傾斜的構造で調整されている。腰帶には明確に輪郭形成が現れる。	S T37 F	12.4	19.4	19.4	7.6	IV	後期末-前期初頭	
1258 022	II-12	# 腹部はやや内面しながら口縁へ立ち上がり、7個の小窓状口縁が並ぶ。脚部上半部は直腹形で腰帶部が施され、下半部はやや細い腰帶状文様で腰帶上半部は直腹形である。腰帶は無文である。	26-BG II	11.2	24.8	24.8	6.8	#	#	
1258 023	II-4	口縁部・脚部欠損。脚部上半に圓文による腰帶文。腰帶部から腰帶する渦曲文様が施されており。復元実測のため、全体の腰帶構成は不明である。腰帶全体に朱色の墨が認める。	S T37 F	16.0	—	11.4	—	VII-3	大柄BC式	
1258 024	II-3	# 口縁部欠損。脚部にやや斜めの小窓が並んで腰帶部を5個形成。脚部中央では2個隣接のコブが腰帶部で4組結ばれている。1組を残し他は脚部は無文で斜め腰帶は施文されている。	S K47 F	16.0	—	7.4	4.2	VII IV	後 前 水	
1258 025	II-13	# 口縁部は右肩に着しながら左肩から右肩へ。口縁部から脚部は無文部として、脚部はII式Rと記載。3段腰帶部は腰文無しである。脚部下端はアズリにより傾斜的構造で調整されている。腰帶無文である。脚部上半に最大腰幅をもつ。	S K47 F	20.2	8.8	16.4	7.0	VII-2	後期末-前期初頭	
1258 026	II-14	# 口縁部が腰帶と外側へひく。口縁部から腰帶部は圓文部として、脚部地文には上からS.R.S.R.L.とRとR文様が円段に施文される。脚部上半に最大腰幅をもつ。	27-BG II	10.8	7.2	11.0	4.4	#	#	
1258 027	II-15	口縁部欠損。脚部から腰帶部は圓文部として、脚部地文は直腹で上からS.R.S.R.L.とRとR文様が記載。腰帶部は斜めで腰帶部はアズリにより傾斜的構造で調整されている。	X-O (12.2)	—	10.2	4.8	VII-1	#		
1258 028	II-5	脚部下半から脚部の内側部、脚部の上部と腰帶部。腰帶部付近に腰帶が発達し、直腹上部は地文としてRとR文様で脚部は斜め腰帶文となる。腰帶は赤褐色で直腹部では腰帶文さへはり腰帶文となる。	S T37 F	(3.2)	—	—	4.8	IX	#	
1258 029	II-6	# 腹部が腰帶部が施しながら外側へ。腰帶部表面外側は直腹、内側に腰がつく。腰帶部は外側部とよく腰帶部で繋がっている。腰帶部は2回腰帶若千の形である。該部は腰帶部は2次腰帶を施してより後化腰帶の付属腰帶と見られる。	17-BG II	6.0	12.8	12.8	4.8	#	#	
1258 030	II-10	脚部から腰帶部にかけて腰帶と内側部にながら直腹部的に立ち上がる。腰帶部は直腹で上からS.R.S.R.L.とRとR文様が施されている。脚部は斜めで腰帶部はアズリにより傾斜的構造で腰帶部はアズリにより腰帶文と見られる。内側部は下部に腰帶文が施されている。2次腰帶は受けている。	17-BG II	9.0	14.2	14.2	6.8	#	#	
1258 031	注口	口縁部欠損。腰帶部全周に腰帶文が施されている。腰帶部はやや左肩に着ながら左肩から右肩へ。腰帶部は直腹で上からS.R.S.R.L.とRとR文様が施されている。	S T35 F	(8.0)	—	12.8	—	VI-1	#	
1258 032	II-20	口縁部欠損。腰帶部の直腹部は斜めで腰帶部は直腹で上からS.R.S.R.L.とRとR文様が施されている。脚部は直腹で上からS.R.S.R.L.とRとR文様が施されている。腰帶部は斜めで腰帶文と見られる。	S T37 Y	(31.4)	—	—	9.6	IX	#	
1258 033	II-19	# 体部下半欠損。腰帶部はやや内側部である。腰帶部は直腹で上からS.R.S.R.L.とRとR文様が施されている。脚部は直腹で上からS.R.S.R.L.とRとR文様が施されている。腰帶部は無文である。腰帶部は全体に暗黒褐色を呈する。	S T35 Y	(19.0)	24.0	27.0	—	#	#	
1258 034	II-17	# 腹部全面腰帶文様。I式・II式・III式の腰帶部を用いて腰帶部が複数からなる。口縁部より腰帶部の腰帶文は斜めになっていた。腰帶部では直腹で腰帶部は斜めで腰帶文と見られる。腰帶部は無文である。	26-BG II	41.0	29.0	31.4	9.8	#	#	
1258 035	II-16	# 腹部全面腰帶文様。腰帶部は直腹で上からS.R.S.R.L.とRとR文様が施されている。腰帶部は直腹で上からS.R.S.R.L.とRとR文様が施されている。腰帶部は斜めで腰帶文と見られる。	27-BG II	(30.2)	—	—	11.4	#	#	
1258 036	II-18	# 口縁部欠損。腰帶部から腰帶部の直腹部で立ち上がる。腰帶部は腰帶が堅く伸びて直腹部では斜めである。脚部地文は直腹である。腰帶部は直腹で上からS.R.S.R.L.とRとR文様が施されている。	27-BG II	(32.8)	—	—	9.8	#	#	
1258 037	II-21	# 大柄の初期腰帶部。腰帶部は直腹の工具で全体に比較的丁寧に腰帶部に腰帶文を施している。腰帶部は無文である。腰帶部は直腹で上からS.R.S.R.L.とRとR文様が施されている。	S T37 Y	37.8	37.6	37.6	10.0	#	#	

凡人

○本表は昭和道路出土の完熟土器および復元實測した土器についての整理表である。
各項目番号・昭和番号は本調査地の各実測図・既定圖形中に用いた番号と一致する。

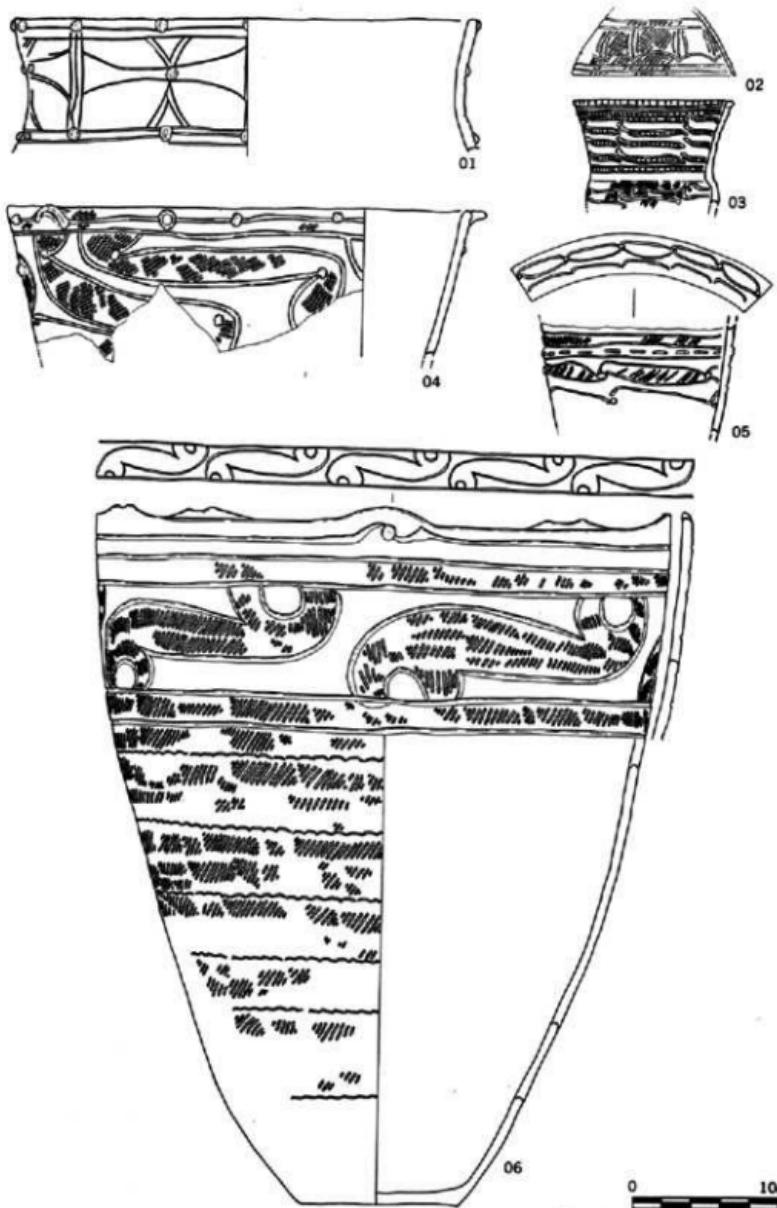
○盤面番号・回転番号は本指標盤の各実測図・写真回路中に示した番号と一緒に取る。回転番号の上端は回転の番号。下段は回転中番号。

○出土地點は、**下丁一號六組層**と**K-1主層**をあらわし、**F**は覆土、**Y**は床面からの出土を意味する。また、包含層出土土器はテリッド番号で地點名、**1**あるいは目で出土部位をあらわしている。

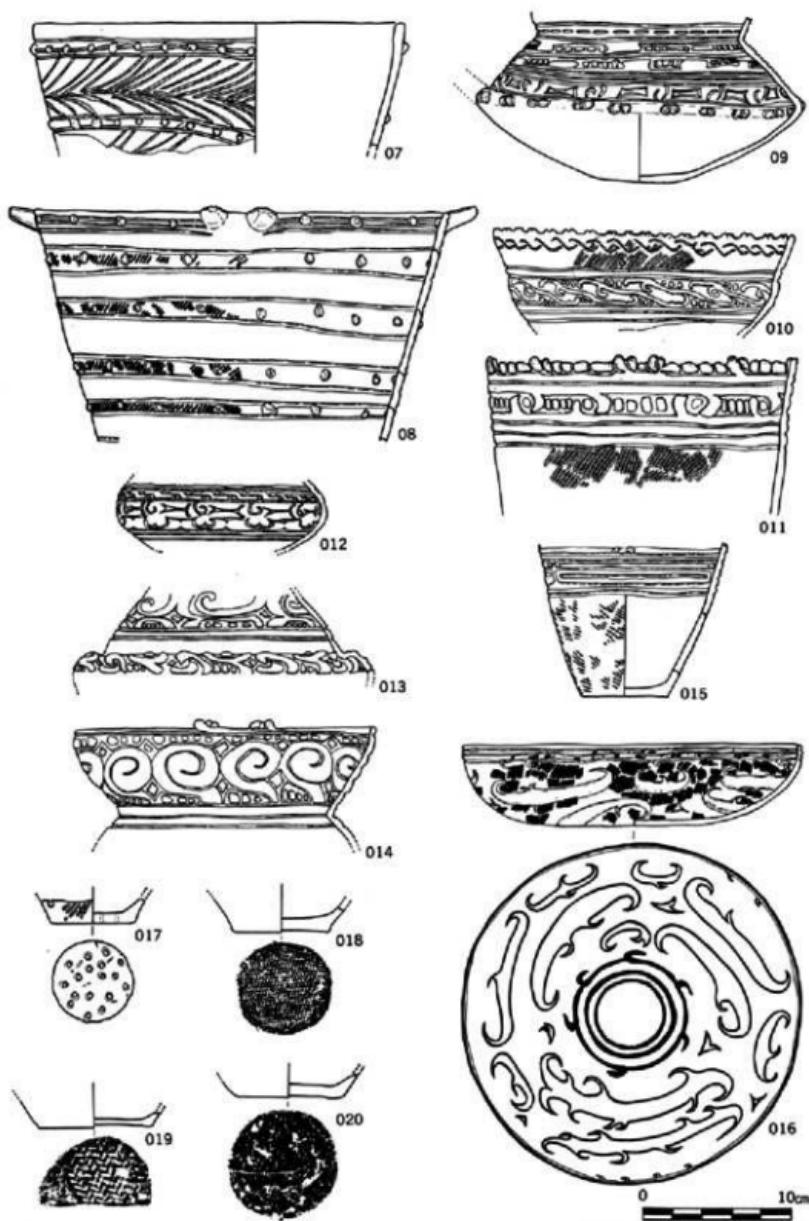
の面高は（ ）内に現存面をあらわす。計画不適なもののは——としたが、各計画面は（ ）を基準とする。

の調査は調査科の時間あるいは特徴を記入した。なお、コア付土壤各型式・深幅は安孫子(1960年)による。

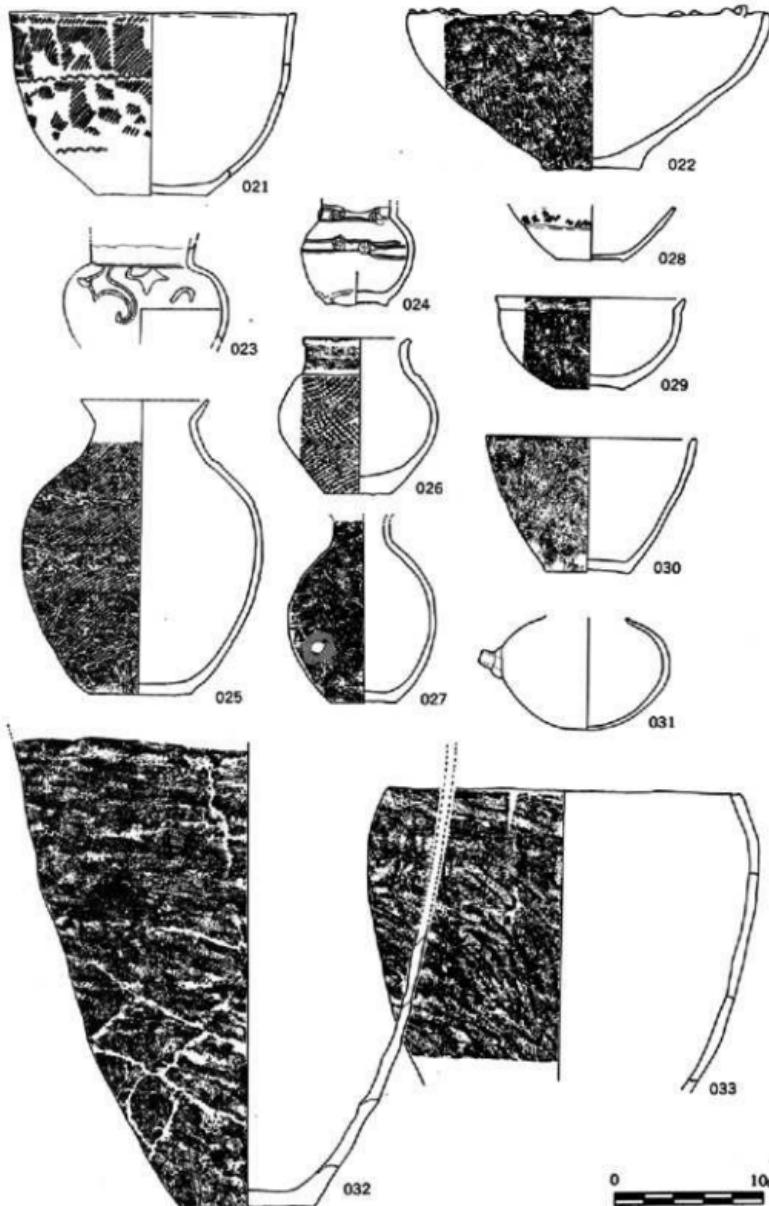
◎大洲 BC₁・BC₂は BC₁→BCの音手、BC₃→BCの新しいものの概念である。



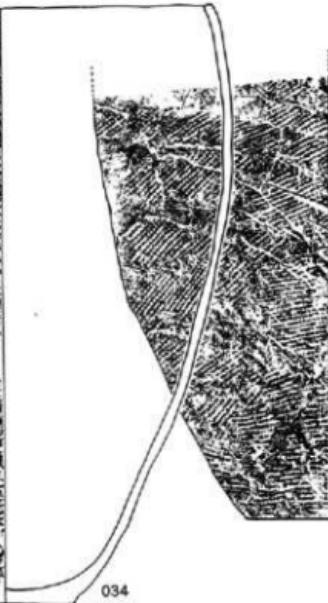
第10図 土器実測図 (1)



第11図 土器実測図 (2)

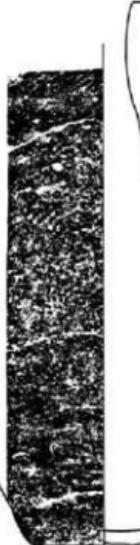


第12図 土器実測図 (3)

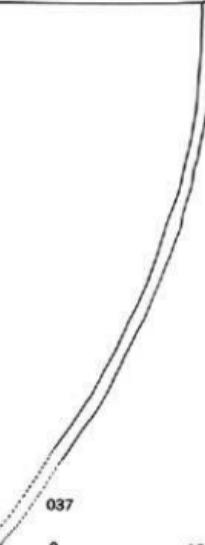


034

035



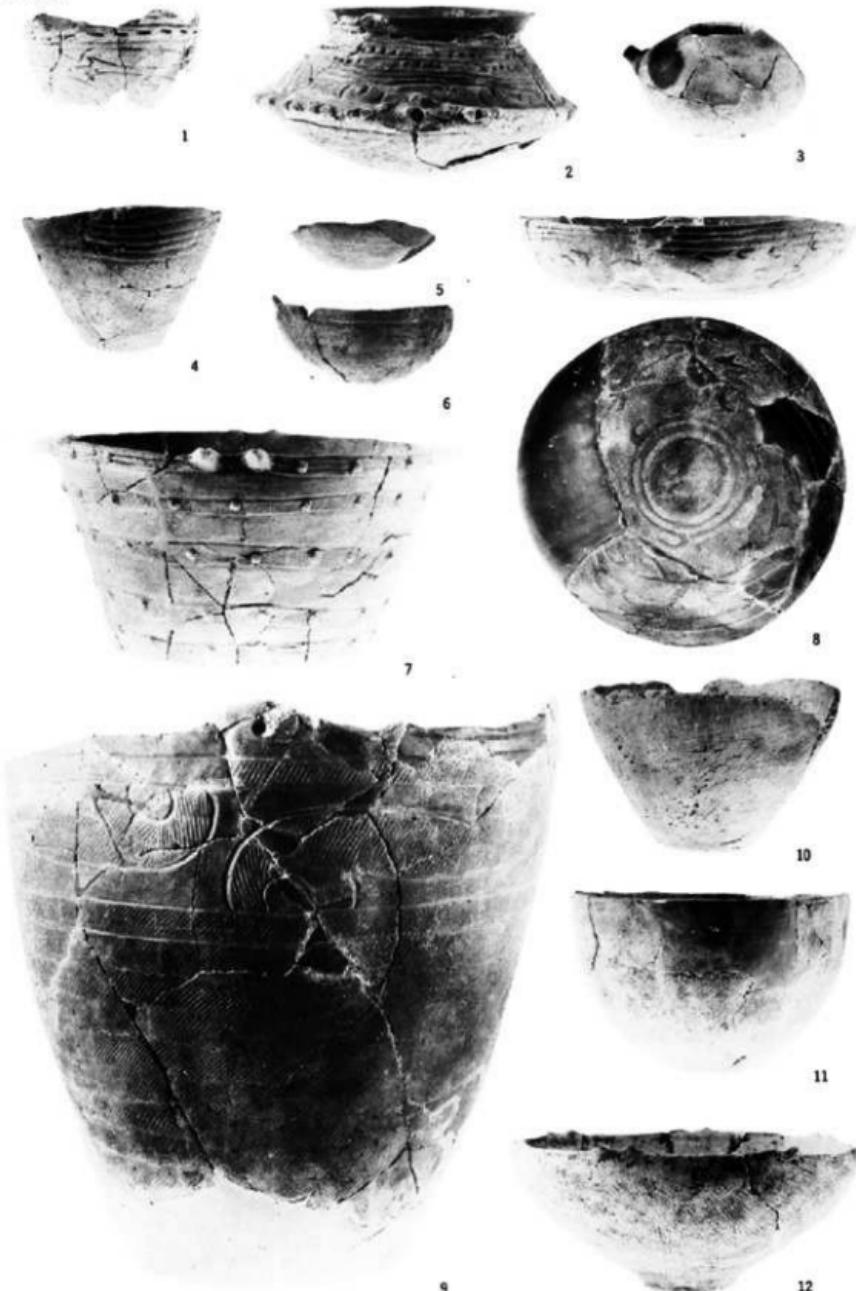
036



037

0 10cm

第13図 土器実測図 (4)

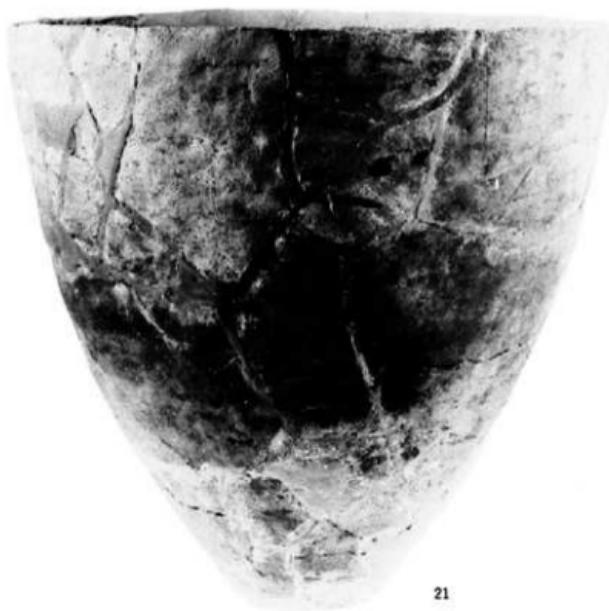




完形土器（2）



20



21

c 土製品・石製品

本遺跡から出土した土製品・石製品には、土偶・異形土製品・土製円盤・石棒・石剣・石刀・石製円盤・土錐・有孔石製品などの種類がある。また、袖珍土器もこの項で扱う。

袖珍土器（第14図1～5・7）

1は壺形で口縁部が波状をなす。体部文様は次線と磨消繩文で描出される。3単位の8の字が主モチーフでモチーフ間には三叉文が入る。大洞B式か。2の壺形土器は頸部が細く、体部上半の平行沈線間は細い棒状工具で連続刺突されている。器面に朱塗痕が認められる。晚期。3は体部無文で全体によく研磨されており、4は手づくねの注口土器でやはり無文である。5～7は台付で6にはLR繩文が施文される。

土偶（第14図10～22）

10は頭部で顔面は偏平、後頭は丸みをもつ。11は頭部・腕部欠損、腹部上位に盛り上がりをもち、腰部には前後とも沈線で簾状の文様が描出される。12は胸部片で下腹部が膨み、妊娠状態を示す。13～15・17・18は脚部である。14は動物の脚の可能性もある。18は脚部となるか不明だが、全面に繩文が施される。19～21は肩から腕部である。22は晩期遮光器土偶と呼ばれるものの頭部の一部であろう。

異形土製品（第14図16・23・24）

16は貝形土製品で巻貝状を呈し、内部は中空となる。23も中空である。24は先端が丸味をもつ円筒形で平行沈線で描出されるモチーフ内に先端の丸い工具で刺突される。

円盤状土製品（図版15-1～6）

統計で17個出土した。いずれも土器体部片を利用している。土器IV群6類のモチーフのものもあり、概ね後期末葉の時期が与えられよう。直径は36～55mm、重量は10～28gまでの幅をもつ。平均値は直径45mm・重量が16.4gとなる。

石棒・石剣・石刀（第15図25～29・図版15）

25は有頭の石棒で頭部に綾杉状の陰刻が施され、極めて精巧な作りである。全体に研磨もいきとどいており、断面はほぼ円形をなす。26は断面偏平であり石剣として把えられる。有頭で頭部には陰刻が施される。27はさらに偏平で全体がよく研磨されて文様は施されない。28は石刀で、形状は正に「日本刀」を想起させる。背刃に陰刻が施され、精巧に作り出されている。29はやや大型の石棒で有頭であるが陰刻はみられない。実測図掲載資料を含め、石棒8点、石剣13点、石刀1点の22点が出土したがいずれも欠損品であった。

円盤状石製品（図版15-7～9）

統計で11点出土した。偏平な課を利用し円形に打ち砕き作り出している。側面を磨って成形しているものもみられる。重量、大きさにより大きく4タイプに分けられる。1は径

3~4 cmで重量50 g未満、2は5~7 cmで50~100 g、3はやや大型で150 g前後、4は大型で1 kgを超える。

土 錘 (図版22-122~123)

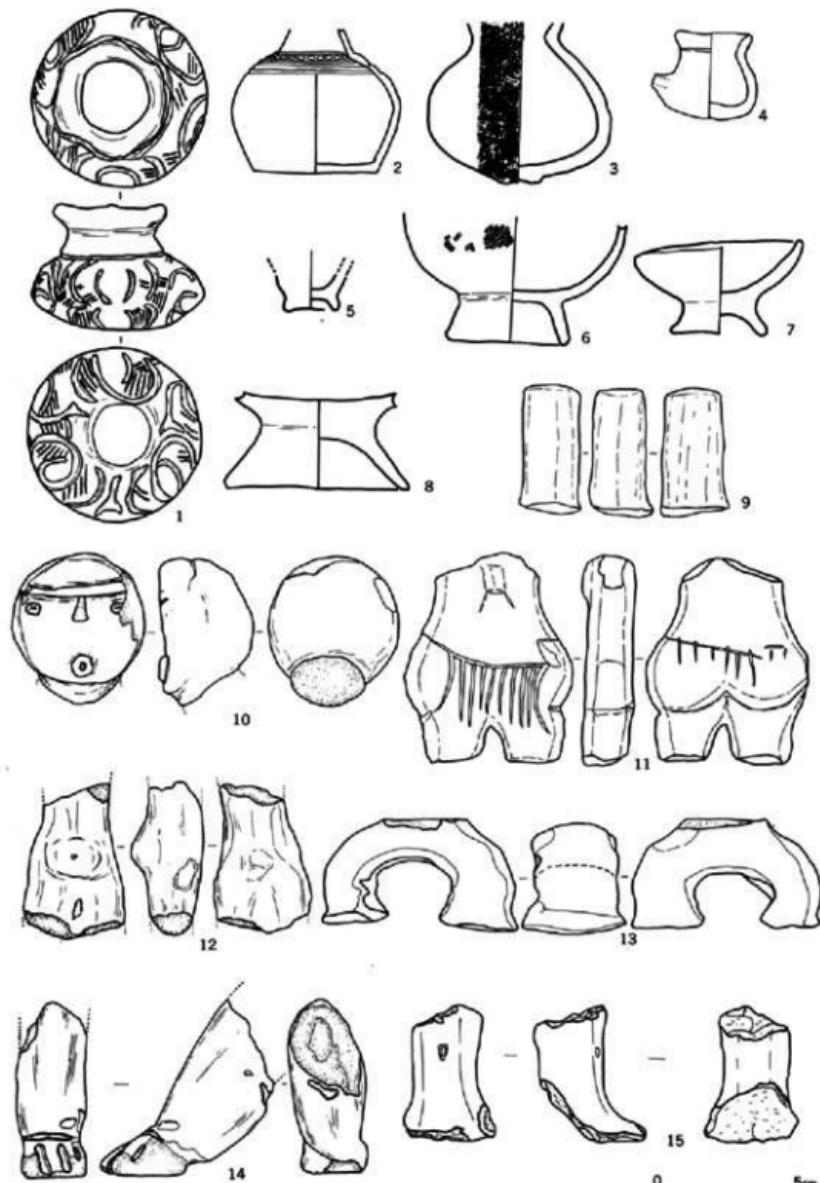
2点出土。2点ともいわゆる有溝土錘である。渡辺誠氏(1973)による有溝土錘第1類D種にあたる。

有孔石製品 (図版22-116~121)

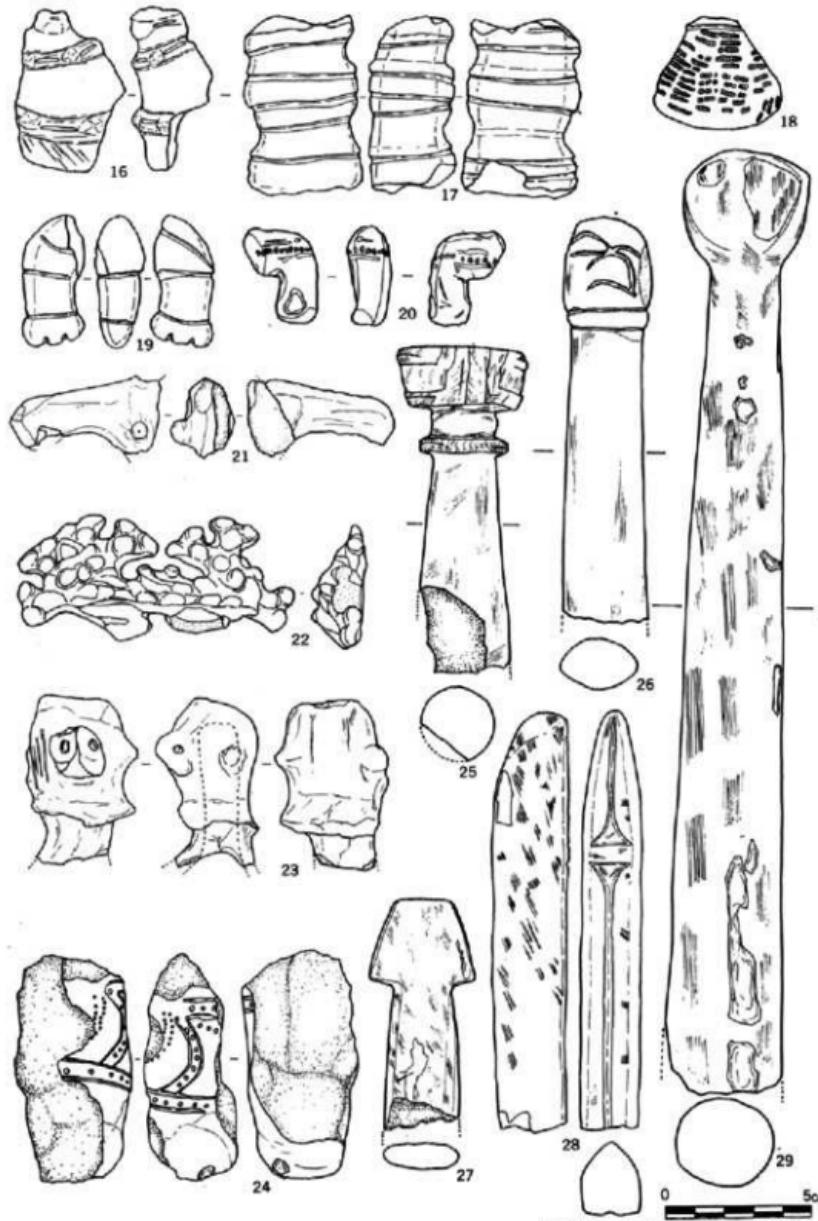
6点出土。不定形な偏平の礫に2~5 mm大の孔を穿つ。穿つのを中断しているものもみられる。使途不明である。

表-4 土製品・石製品実測図掲資料一覧(第14・15図)

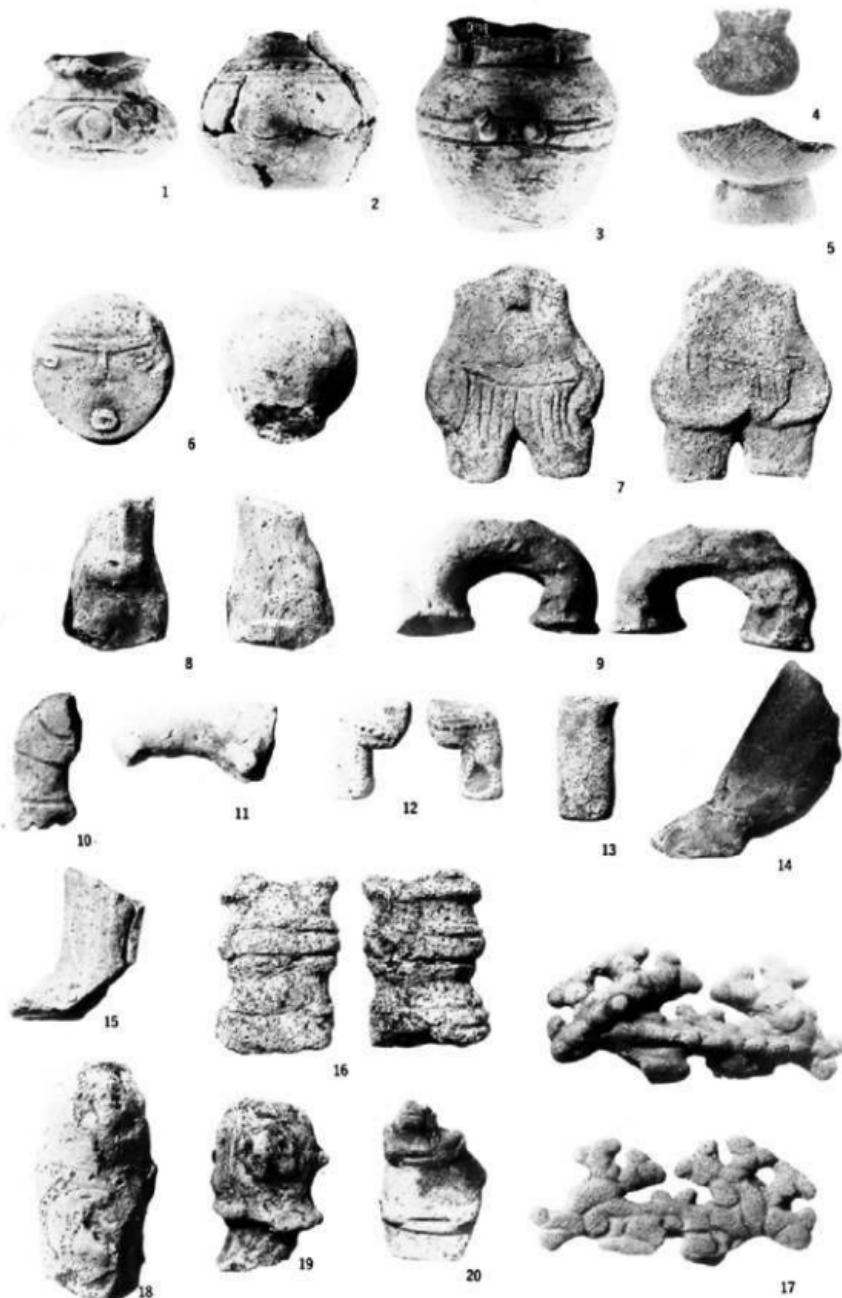
円盤状土製品・計測値						
番号	種 別	出土地(層)	備 考	長径 (mm)	短径 (mm)	重量 (g)
1	袖珍 土器	X - O	図版14-1	1	47	45
2	"	S T 3 (F)	図版14-2	2	41	37
3	"	17-21 (II)	—	3	42	37
4	"	20-22 (II)	図版14-4	4	50	43
5	"	26-23 (II)	—	5	60	49
6	"	16-23 (II)	図版14-5	6	41	38
7	"	S T 35 (F)	—	7	44	41
8	"	S T 38 (II)	—	8	39	38
9	棒状土製品	16-20 (II)	図版14-13	9	44	39
10	土 偶	18-21 (II)	図版14-6	10	56	47
11	"	S T 38 (F)	図版14-7	11	39	36
12	"	S T 1 (II)	図版14-8	12	42	41
13	"	24-19 (II)	図版14-9	13	36	30
14	"	26-23 (II)	図版14-4	14	46	41
15	"	24-19 (II)	図版14-15	15	40	33
16	貝形土製品	X - O	図版14-20	16	50	45
17	土 偶	10-12 (II)	図版14-16	17	48	43
18	"	19-23 (II)	—	18	—	—
19	"	S T 37 (F)	図版14-10	1	38	40
20	"	20-19 (II)	図版14-12	2	34	34
21	"	S T 37 (F)	図版14-11	3	44	40
22	"	S T 37 (II)	図版14-17	4	57	54
23	異形土製品	18-20 (II)	図版14-19	5	70	60
24	"	S T 38 (F)	図版14-18	6	62	49
25	石 棒	S T 37 (II)	図版15-12	7	61	52
26	石 刺	16-18 (II)	図版15-14	8	54	55
27	"	X - O	図版15-10	9	74	71
28	石 刀	S T 37 (F)	図版15-13	10	75	64
19	石 棒	27-17 (II)	図版15-15	11	65	54
※ 番号は第14・15図中の番号と一致する。						
円盤状石製品・計測値						
番号	種 別	出土地(層)	備 考	長径 (mm)	短径 (mm)	重量 (g)
1	石製円板	1類	—	1	38	40
2	"	2類	—	2	34	34
3	石製円板	2類	—	3	44	40
4	"	—	—	4	57	54
5	"	—	—	5	70	60
6	"	—	—	6	62	49
7	"	—	—	7	61	52
8	石製円板	3類	図版15-7	8	54	55
9	石製円板	3類	図版15-8	9	74	71
10	"	—	—	10	75	64
11	"	—	—	11	65	54
12	"	—	—	12	69	59
13	石製円板	4類	另欠損	13	132	96
14	石製円板	4類	図版15-9	14	180	136
						1,097.6

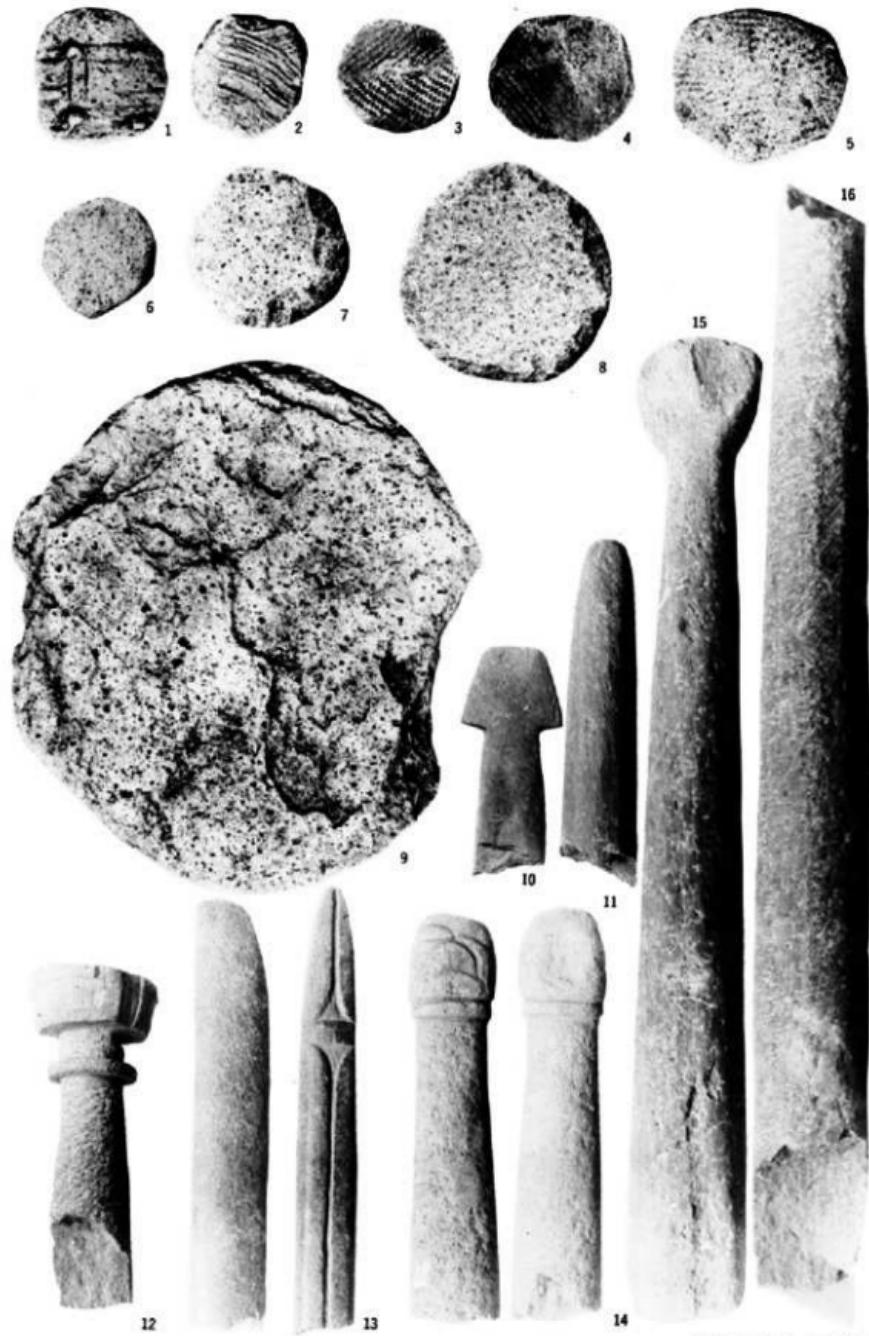


第14図 土製品（1）



第15図 土製品(2)・石製品





土製品(2)・石製品

d 石 器

今回の調査で出土した石器は、整理箱にして約5箱である。大半が遺構内およびその周辺部から出土しており、遺構の配置ならびにその検出数に比例して出土している。

石器の種類は、石鎌・石錐・石匙・搔器・削器・磨製石斧・打製石斧・石錘・磨石・凹石・石剣・石刀・石棒・円盤状土製品・有孔石製品などがある。石材は、打製石器ではほとんどが頁岩でこれにチャート・鉄石英が若干用いられている。磨製石器では、磨製石斧や石棒・石剣などは流紋岩・砂岩・蛇紋岩を用い、他は砂岩・安山岩・凝灰岩などを使用している。

異形石器（図版16-1）

長さ2.5cmで、ひと型様の形を示し、肩部・脚部などに丸味をもつような抉りがみられ、身部は平坦なつくりとなっている。

石 鑿（図版16-2～44）

中茎の有無により有茎と無茎のものと分けられ、さらに全体および基部の形態の違いから次の7つに分類される。

a類（2） 正三角形状を呈し、無茎で基部の抉りが深く、先端部にかけて幅広になる。

b類（3～5） 二等辺三角形状になり、無茎で基部の抉りが浅い。3は基部の側縁が直線的で先端部で狭くなる。4・5は側縁全体が丸味を有し中央部が幅広となっている。

c類（6～14） 二等辺三角形を呈し、無茎で基部の抉りが浅く丸味を有し、最大幅が基部にもとめられる。9・11・12は全体に細身で茎部の最大幅も他と比べて狭い。13・14は中央部がやや幅が広く、側縁が丸味みもつ。

d類（15～30） 有茎で基部の突出がやや長く、菱形の外形を呈するもので、全体の形は正三角形ないし二等辺三角形状になっている。基部周辺部の身が厚く、最大の幅を有している。28・29は全体に細く、基部が他のものと比べると長い。

e類（31） 無茎で、基部の抉りが非常に深く、身部も全体に厚い。

f類（32～40） 有茎で全体の形が菱形状を呈し、身部と基部の境が明瞭でない。32～34・39は身部より比較的基部が長くなっている。形態的には石槍に類似している。

g類（41～44） 基部の突出が短く、非常に狭くなり、菱形の外形を示す。側縁部が全体に丸味を有している。

石 锥（図版17-45～60）

錐部およびつまみの違いから、2つに分けられる。

a類（45～50） 縱長剥片の側縁ならびに基部に剥離を加え、錐部とつまみ部を作出する。そのためつまみ部が全体的に棒状（45・51）や笠状（48～50）などを示し、錐部も側

縁部が平行にのび長目であり、断面形が四辺形を呈している。

b類 (54~60) 不定形な剝片の一端に剝離を施し、錐部を形成し、先端部のみを調整し剝離して、短く鋭角的に作出する。基部にはあまり加工が行なわれていない。

石匙 (図版17~61~67 図版18・19~68~89)

刃部とつまみの位置関係から縦形と横形に分けられ、さらに刃部形態により3つに分けられる。(62・64) を除きそのほとんどが片面加工である。

a類 (61~65) 縦形石匙で、つまみのくびれの作出は、背面よりも主要剝離面によく調整され、刃部が側縁にあるものでナイフ形に類似している。65は峰にあたる部分が自然面をそのまま残している。

b類 (66・67) 縦形石匙で、a類と作出する方法は同様であるが、刃部は先端にあり搔器状を呈している。

c類 (68~79) 横形石匙で、刃部が直線的に形成されて、つまみが刃部に対して斜交して作出されている。つまみは、主要剝離面から背面から丁寧な押圧剝離が施されている。(68~75) と (76~79) は左右対称につまみが施されている。70・76のつまみの抉りにタール痕が付着している。72の刃部は先端にみられ搔器状になっている。

c類 (80~89) 横形石匙で、刃部が直線になるものと丸味をもって作出され、つまみが刃部に対してほぼ垂直になっている。刃部が直線的なものは (80~83) で、丸味を有しているものが (84~89) である。刃部の位置や剝離の方法からみてナイフ形に類似している。

搔器 (図版20~90・95・97)

剝片の先端に丁寧な剝離を施し、主要剝離面に対して急角度の刃部をもち、大半が片面加工である。外形は円形のもの (97) や、縦長のもの (90・91) などがみられ、刃部の形態については、弧状を呈する。97はエンドスクレイパー状を呈している。

削器 (図版20~92~96・98)

縦長剝片の側縁部に刃部をもつものである。刃部の角度は鋭角で、搔器に比べ薄刃であり、そのほとんどが片面加工である。外形および刃部形態により3つに分けられる。

a類 (92・94・95) 一部を除き周縁に調整を施し、左側縁部に直線的な刃部をもつ。基部や先端部も良く丁寧に丸味をもって仕上げられ、背面の稜も舟底状に中央部が高く、身部も厚くなっている。

b類 (93・98) 柳葉形状を呈するもので、両端が狭く鋭角的になっている。両側縁部に入念に剝離調整を施している。

c類 (96) 両側縁部にやや丸味のある抉り状の刃部を作出する。

磨製石斧 (図版21-99~110)

いずれも定角式の磨製石斧である。外形は、短冊形を示すものがほとんどで、撥形になるものが(99~101)でいずれも小形である。大半が刃部ないし基部が欠損しており、使用状態が推定される。刃部は直線なもの(99)と丸味を呈するもの(104~110)とに分けられる。丸味を呈するものは恐らく使用する際に刃部が磨耗するものとみられる。

打製石斧 (図版21-111~115)

その外形からみて2つに分けられる。

a類(111) 短冊形を示す打製石斧である。全体的に粗雑であり刃部も磨滅して不明である。

b類(112~115) 分銅形を示す打製石斧である。115は砂岩質の石材を使用しているため磨滅が激しく詳細は不明である。(112~114)は頁岩を用いてつくり、両面加工を施し、荒い剥離の状態である。笠状石器に類似する点がみられる。

磨 石 (図版22-124~131)

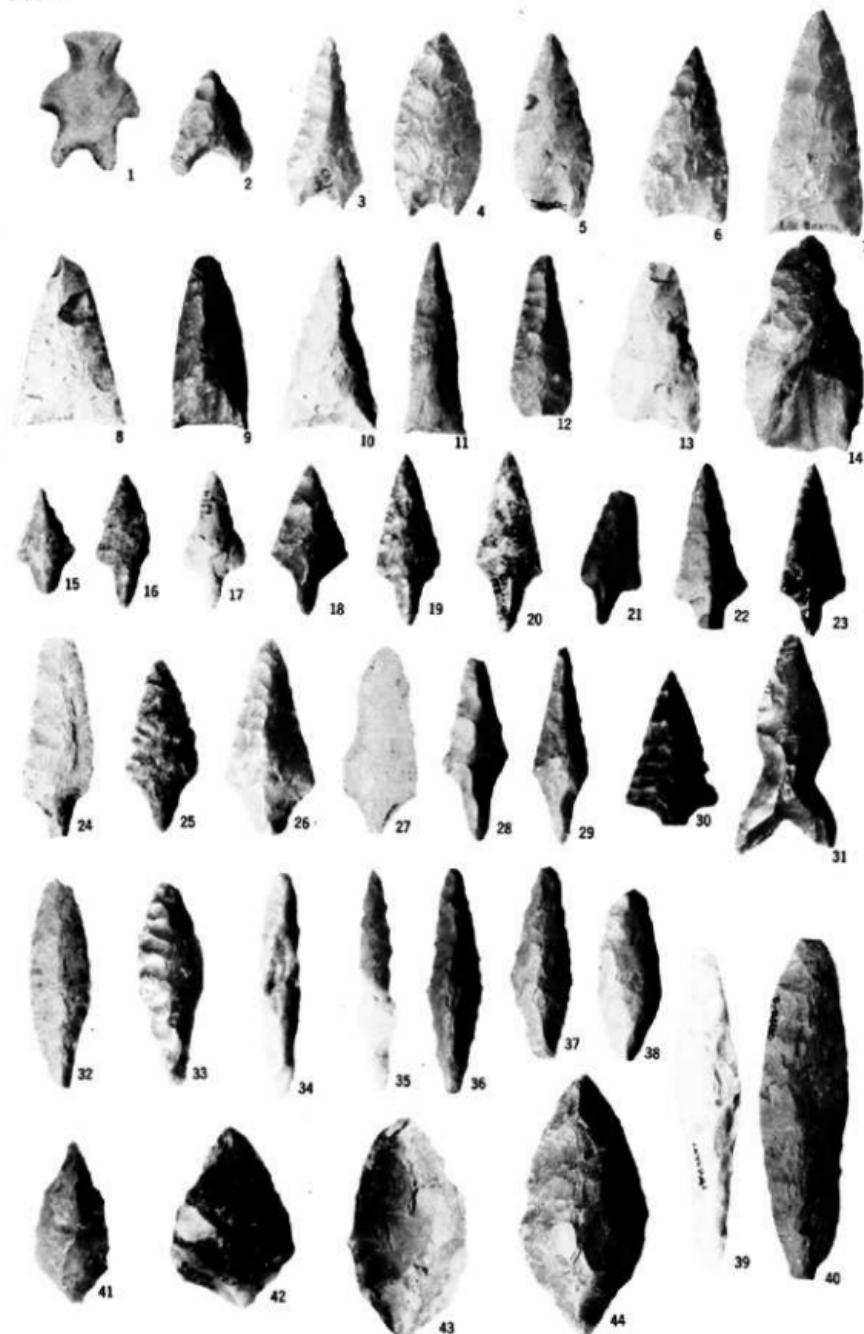
円形・橢円形あるいは方形状を示す自然石の両面および側縁に、磨滅した磨面をもつ石器である。(126・127)は両面がよく磨られ圓平になっている。(130・131)は両面とも中央部の部分的な面のみ磨られて、形状は球状になる。側縁が良く磨られているものは(124・125)であり、(129・130)は側縁の部分的なところに磨面を有する。

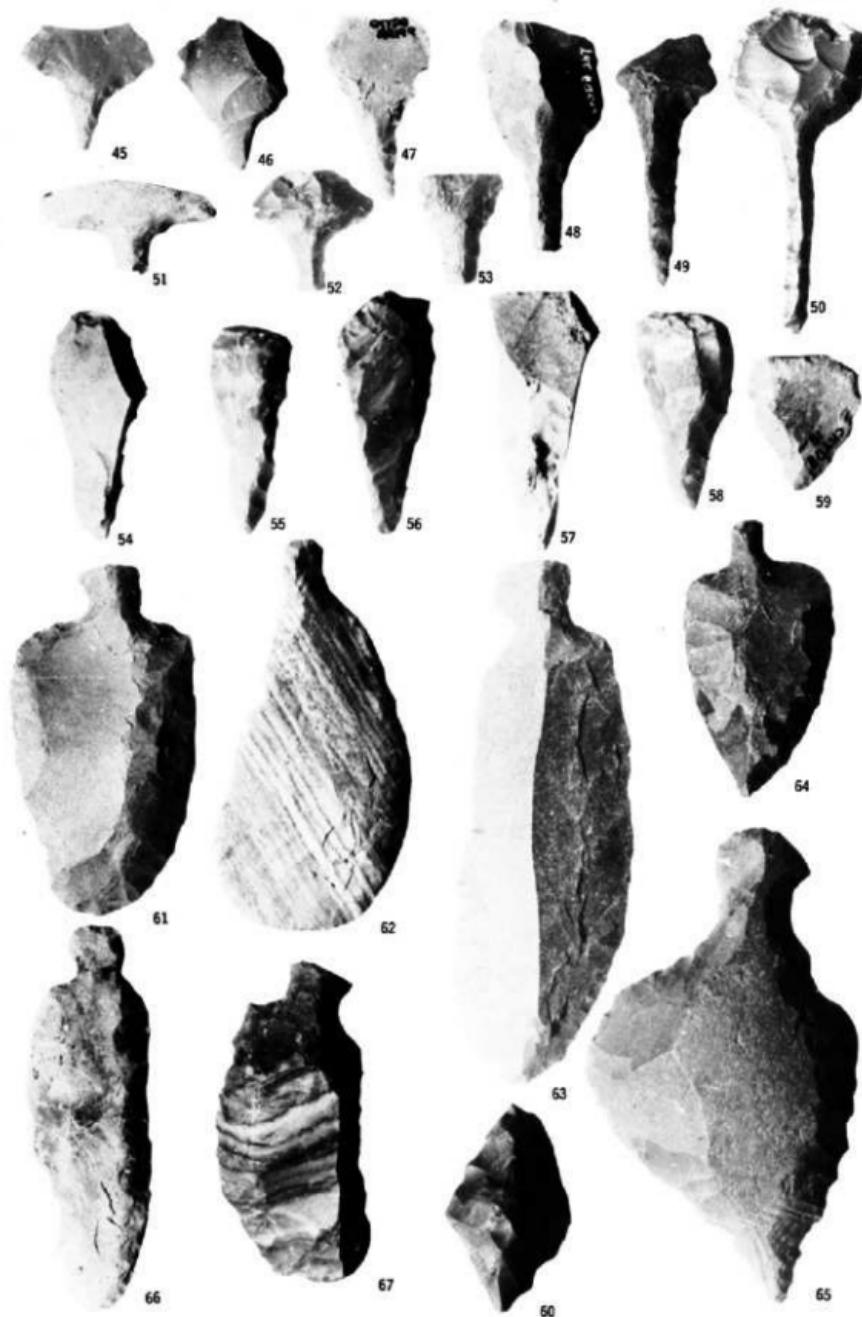
凹 石 (図版22-132~139)

形状は磨石と同様に、円形あるいは橢円形になるものが大半であり、自然石の中央付近に1~数個の凹をもつ石器である。132は片面に凹みが1、133は片面に凹みが2、134は両面に凹みが1、135は両面に凹みが2である。(136~139)は両面ともに不定数に凹みがみられる。(137・138)は凹みの断面が円錐形を示している。

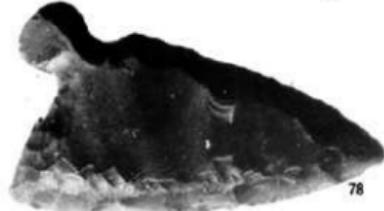
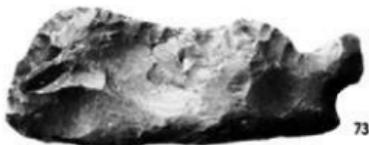
表-5 石器出土地一覧 (番号は図版と一致する)

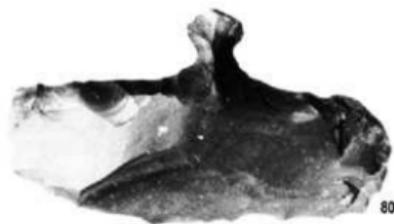
番号	出 土 地	番号	出 土 地	番号	出 土 地	番号	出 土 地	番号	出 土 地	番号	出 土 地	番号	出 土 地	
1	S T37	F ₁	21	S T36 c	F ₁	41	S T35	F ₂	61	S T37	F ₃	101	S T35	F ₁
2	26~20G	H	22	17~21G	H	42	22~24G	H	82	S T1	Y	102	28~19G	H
3	17~23G	H	23	27~17G	H	43	27~24G	H	83	S T35	F ₁	103	25~18G	H
4	S T35	F ₂	24	S T38	F ₁	44	29~23G	H	84	S T36 a	F ₁	104	17~26G	H
5	20~19G	H	25	— O	H	45	29~23G	H	85	S T36 a	F ₁	105	16~17G	H
6	14~21G	H	26	21~19G	H	46	S T35	F ₂	86	S T36 a	F ₁	106	17~24G	H
7	S T36 b	F ₂	27	16~22G	H	47	27~23G	H	87	19~19G	H	107	S T35	F
8	20~25G	H	28	20~19G	H	48	S T36 b	F ₂	88	S T37	F ₁	108	26~24G	H
9	S K22	F ₂	29	S T36 b	F ₂	49	27~25G	H	89	17~21G	H	109	S T35	F
10	S T36 b	F	30	21~17G	H	50	21~21G	H	90	S T2	E P	110	S T35	E P
11	S T1	F	31	20~20G	H	51	17~22G	H	91	11~19G	H	111	26~21G	H
12	S T36 c	F	32	21~17G	H	52	21~17G	H	92	10~13G	H	112	S T36 c	F ₁
13	15~20G	H	33	S T37	F ₁	53	S T36 b	F ₁	93	10~12G	H	113	S T36	F ₁
14	25~19G	I	34	S T36 c	F ₁	54	S T35	F ₂	94	25~25G	H	114	S T35	F ₂
15	25~19G	I	35	S T1	Y	55	S K48 [*]	F ₁	95	21~25G	H	115	S T35	F ₁
16	16~22G	H	36	S T37	F ₂	56	S T35	G	96	16~17G	H	116	S T35	F ₁
17	S T35	F	37	24~24G	H	57	24~24G	H	97	S T1	F ₁	117	S T37	F ₁
18	17~21G	H	38	S T35	F ₂	58	17~21G	H	98	S T1	F ₁	118	S T35	F
19	S T1	F	39	S T35	F ₂	59	29~19G	H	99	14~17G	H	119	24~25G	H
20	21~24G	H	40	24~19G	H	60	25~20G	H	100	S T37	F ₁	120	S K46	F ₁

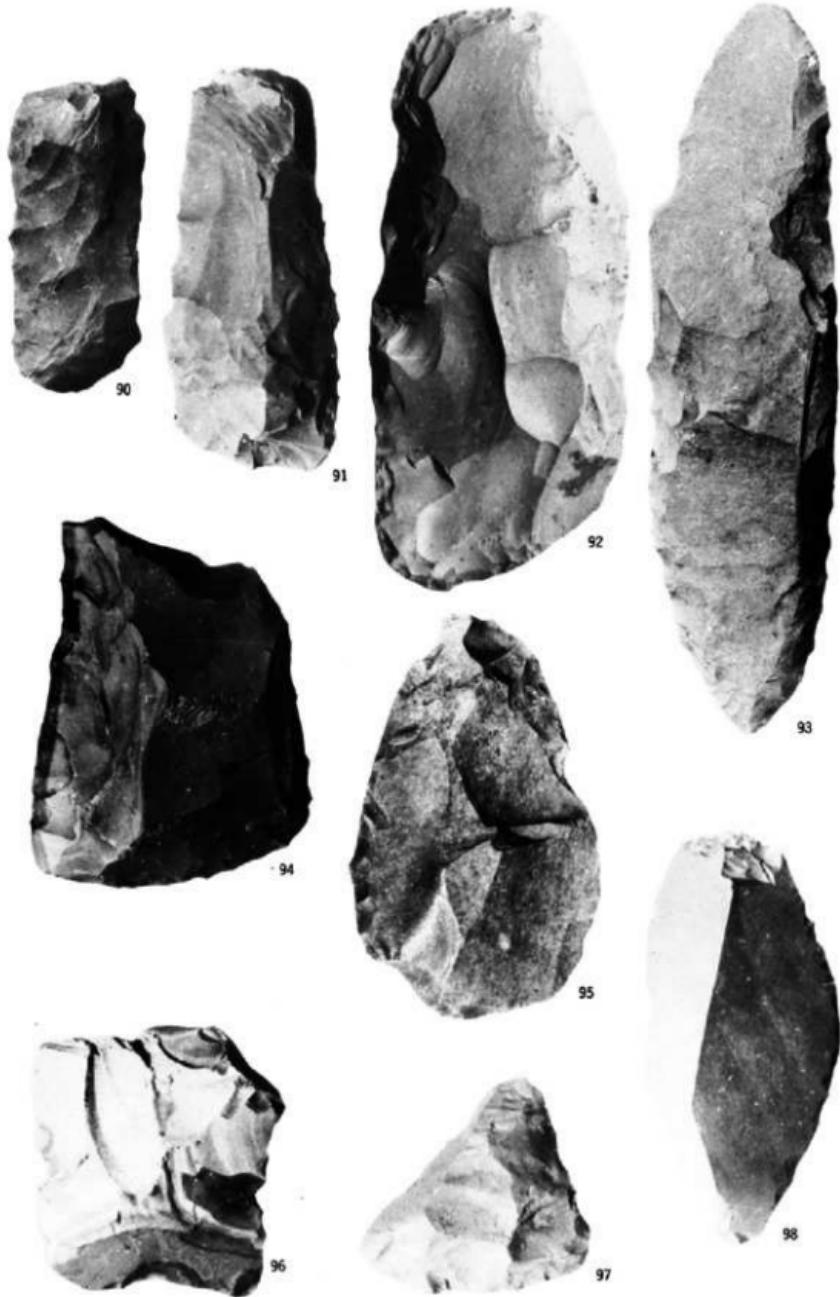


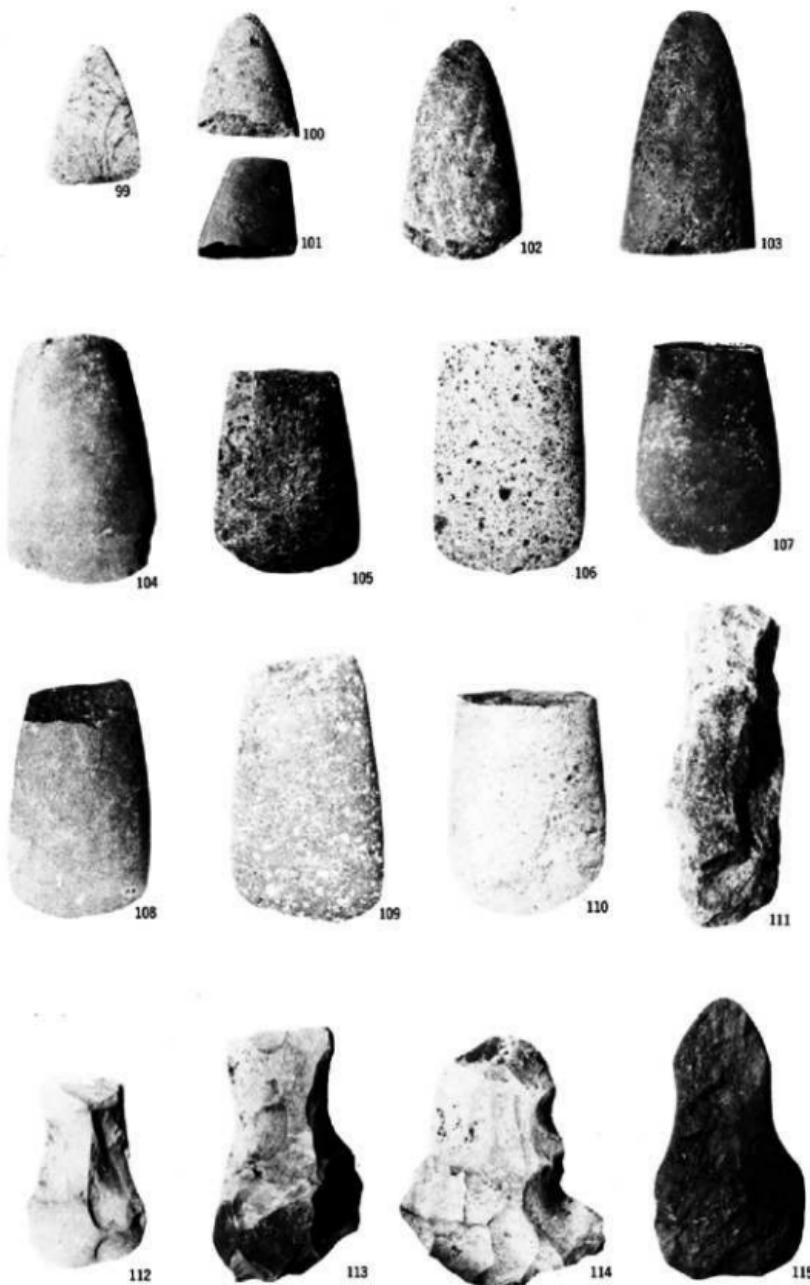


石錐・石匙（1）

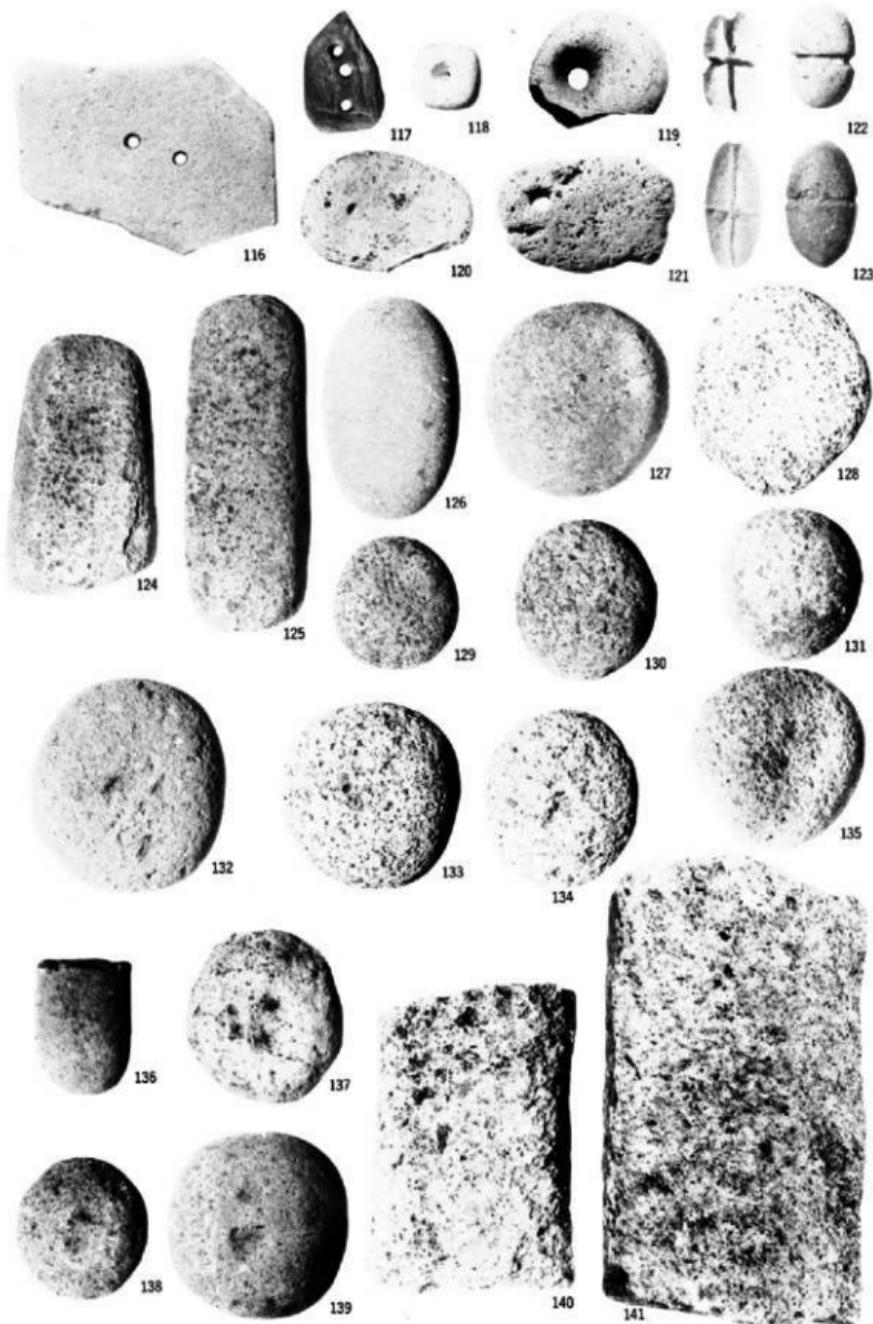








磨製石斧・打製石斧



有孔石製品・土錘・磨石・凹石・石棒

V まとめ

今回発掘調査した泥部遺跡は、上山市の東部に位置し、生居川の上流の右岸冲積岸河段上に立地し、縄文時代後期末葉から晩期初頭にかけての主要な時期の集落跡である。本遺跡で今回検出された遺構は、竪穴住居跡10・土壙44・不明遺構2であり、出土した遺物は主に土器や石器で整理箱に約135箱を数える。

今回は、上山市上生居字包小屋地内に昭和57年度より県営生居川ダム建設事業に係るため、事前に緊急発掘調査を実施したものであり、これらの記録をまとめたものが本報告書である。

本遺跡で検出された遺構の時期は、住居跡では1～4・36b・c・37・38号住居跡が縄文時代後期の広義の新地式期に相当し、平面形が不整長方形ないし方形を呈し、柱穴の位置が壁あるいは壁際に寄って巡っているのが特徴である。35・36a号住居跡は縄文時代晩期の広義の大洞BC式期に比定され、橢円形を呈し、主柱穴が中央部に支柱穴が壁付近にあるのが特徴であり、住居跡の変遷を知る手がかりとして貴重な資料を提供したものである。土壙は13号土壙をのぞき、すべて縄文時代後期の新地式に相当する。

出土した土器は縄文時代前期から晩期まで及ぶが主体は後期末～晩期初頭である。後期末葉期の所謂「コブ付土器様式」ないし新地式の名で呼ばれる土器群、および晩期大洞B₁からBC式がその中心である。本報告では出土土器をその時期・器形によりI群からXIII群に大別し、主に第IV群（コブ付土器）と第V群（三叉文他）、さらに第IX群（羊齒状文）を中心とした。第IV群土器については前述の通り安孫子氏（1969他）に拠るところが多い。完形土器は別として土器片の分類では小片のため器形・モチーフが判然としないものもあり十分なものとは言えない。第V群土器は時期的に問題点を含むが一応晩期として扱った。また第V群土器は注口第VI群2類との関連で羊齒状文の系統を追う意味で興味深い。なお、各類土器・完形土器については本文中でその比定される時期、段階を記したのでここでは省く。

土製品、石製品にも貴重な資料が得られている。土製品では土偶の他異形土製品、貝形土製品の出土もみられた。また、石製品では石劍、石刀などが充実しており、宗教的意味あいを考えれば、遺跡のあり方を考える上で貴重なものであろう。

出土した石器は、それぞれの器種の時期はその大半が縄文時代後期末から晩期初頭の時

期である。特徴的なことは、礫石器の一群である磨石・凹石の量的な割合は少なく、石錐・石匙などの打製石器の量が多いことである。しかし、一般にこの時期の遺跡は全体的に石器の量が少ないので特徴である。

(参考・引用文献)

- 1 1962 後藤 勝彦 「陸前宮戸島浜台圓貝塚出土の土器について」「考古学雑誌第48巻1号」
2 1964 山内 清男 「日本原始美術I 繩文式土器」
3 1967 佐藤 鎮雄 「石ヶ森遺跡の土器について」「山形大学教育学部 歴研月報」
4 1967 安孫子昭二 「谷定出土の深鉢とその編年的位置について」「庄内考古学第6号」
5 1967 佐藤 鎮雄 「高畠出土の後期後半、晩期初頭の繩文式土器について」「庄内考古学第6号」
- 6 1969 山形県
7 1969 安孫子昭二
8 1971 塙益高校社
会 部
9 1971 後藤 勝彦他 「山形県史考古学資料編」
10 1971 佐藤 稔宏 「東北地方における後期後半の土器様式」「石器時代9号」
佐藤 鎮雄
11 1971 佐々木洋治 「宮城県七ヶ浜町二月田貝塚」
12 1972 佐藤 稔宏 「神矢田遺跡第1次・第2次調査報告書」(山形県遊佐町教育委員会)
佐藤 鎮雄
13 1979 金子 裕之 「高畠町史別巻考古学資料編」(山形県高畠町)
14 1979 青森県室沢
遺跡発掘調
査 団
15 1980 鶴城高校史
学部後援会
16 1980 安孫子昭二
17 1980 鈴木 克彦
18 1981 鈴木道之助
19 1981 山形県村山
市史編さん
委員会
20 1981 山形県教
育委員会
21 1981 福島県三貴
地遺跡発掘
調査団
22 1981 秋田県教
育委員会
23 1981 野口 義彌
24 1981 鈴木 公雄
林 謙作
25 1982 山形県教
育委員会
26 1982 ノ
27 1982 高畠町教
育委員会
28 1982 尾花沢市教
育委員会
29 1982 安孫子昭二
30 1982 青森県教
育委員会
「高畠町史別巻考古学資料編」(山形県高畠町)
「神矢田遺跡第3次・4次・5次調査発掘調査報告と考察」
(山形県遊佐町教育委員会)
「茨城県広畠貝塚出土の後・晩期繩文式土器」「考古学雑誌第65巻第1号」
「茨城遺跡」
「薄磯貝塚」
「コブ付土器様式から亀ヶ岡土器様式への変遷過程」「考古風土記」第5号
「亀ヶ岡式土器の羊齒状文に関する考察」「考古風土記」第5号
「図録・石器の基礎知識III」(柏書房)
「村山市史編集資料第9号 作野遺跡遺物集成」
「山形県埋蔵文化財調査報告書第33集 山形市柏倉地区遺跡群・坊里敷遺跡」
「三貴地遺跡」
「藤株遺跡発掘調査報告書」
「繩文土器大成3」(講談社)
「繩文土器大成4」(講談社)
「山形県埋蔵文化財調査報告書第57集 町下遺跡」
「山形県埋蔵文化財調査報告書第60集 うぐいす沢遺跡第2次調査」
「高畠町埋蔵文化財調査報告書第1集 石ヶ森遺跡発掘調査報告書」
「尾花沢市埋蔵文化財調査報告書第2集 漆坊遺跡発掘調査報告書」
「繩文時代後晩期」「山形県村山市史別巻1 原始・古代編」(山形県村山市)
「青森県埋蔵文化財調査報告書第70集 馬場瀬遺跡」



泥部遺跡遠景(西方から)



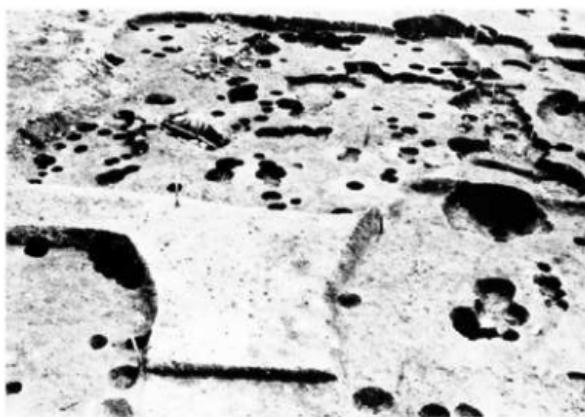
泥部遺跡近景(南方から)



発掘調査風景(粗振段階)



1～4号住居跡
8～34号土壤全景 (S↑)



1号住居跡全景 (W↑)



2号住居跡全景 (W↑)

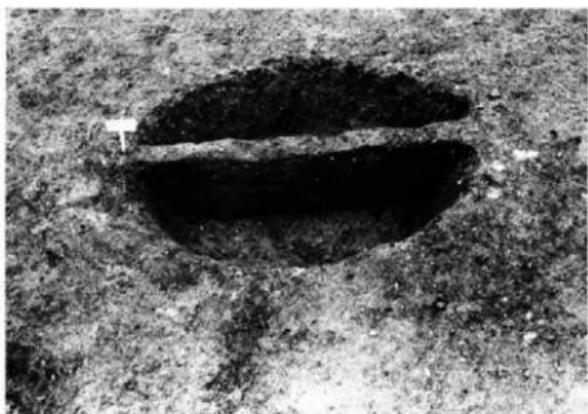




4号住居跡全景 (N↑)



4号住居跡土層セクション
RP150 出土状態 (NE↑)



4号住居跡 (E L 30)
炉跡近接 (S↑)



13~19号土壤 全景 (W↑)



11~19号土壤 全景 (NE↑)



19号土壤土層セクション・
RP140 出土状態 (W↑)



18～23号土壤 全景 (W↑)



18～23号土壤
土層セクション (E↑)



23号土壤 土層セクション
RP256 出土状態 (SW↑)



36~38号住居
39~55号土壤全景 (S↑)



(同上) (E↑)



35・36a・b・c号
住居跡全景 (S↑)



36a・37・38号住居跡全景 (S E ↑)



37・38号住居跡全景 (S E ↑)



36b・c・37号住居跡全景
RP346～348 出土状態 (W ↑)



38号住居跡全景 (NW↑)



39～47・50～53号
土壤全景 (SW↑)



44～46・49・48・51・54号
土壤全景 (E↑)



36a号住居跡内
RP121~123出土状態 (S↑)



37号住居跡覆土
RP347・348出土状態 (W↑)



37号住居跡床面
P346出土状態 (S E↑)

山形県埋蔵文化財調査報告書第70集

どろ　ぶ 泥　部　遺　跡

—発掘調査報告書—

昭和58年3月25日 印刷

昭和58年3月31日 発行

発行 山形県
山形県教育委員会
印刷 大風印刷
